
魔法小路のただの茶屋

ゆずはらしの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法小路のただの茶屋

【Nコード】

N2588Y

【作者名】

ゆずはらしの

【あらすじ】

魔法小路には、怪しげなものが集います。まじないの道具や薬草、フードを深くかぶり、顔を見せない住人…、そんな中に、なんの魔法もない、ごく普通のお茶を出す店がありました。

のんびり、ほのぼのを目指します。

エブリスタで、「べにふうき」の名前で連載中のケータイ小説。手直しをしつつ、「なろう」に上げてゆきます。

第二話はまだ終わっていないので、区切りの良い所で一度、終わりにして、エブリスタで完了してからまた、こちらに移します。

プロローグ（前書き）

ケータイで書いてケータイで読む形式を少し、練習したくて、エブリスタに登録しました。登場するキャラクターは、ケータイアプリで知り合ったゲーム仲間から、名前をいただいています。春頃からじわじわと連載していたのですが、やっと一話分がたまった……。

ブローグ

魔法小路まほうこうじ

ここには、怪しげなものが集う。

まじないに使う、不可思議な形の道具、どんな効能があるのか、
見ただけではわからない、薬草なんそう、軟膏、
飾りとしてよりも、呪文を固定、発現させる道具扱いの、金属、
宝石、

見る者を選ぶ書物や巻物。

様々な土地から運ばれ、集められ、吟味された雑多な品が、ひしめく通り。

そんな通りを歩く者は、フードを深くかぶり、
口数は少なく、
己の身上しんしょうを、必要以上に他者に悟らせようとはしない。

また、ここは、『小路』と呼ばれてはいるものの、
常に変動し続け、姿を変え、大きさを換え、位置を変える場所でもある。

ある時は、整然とした街中を、一つ角を曲がった途端に、
ある時は、薄暗い路地裏に迷い込んだ瞬間に、
ある時は、霧のたちこめる田舎道を、歩いていると不意に、
それぞれに相応しい形、相応しい店の並びで現れる。

邂逅かいこうは、一度限りかもしれない。

見つけて入った店に、二度と出会えないこともあるからだ。
もし迷い込んだなら、とてつもない幸運か、不運をその手にする

だろう……。

それが、この場所。

魔法小路。

そんな通りの片隅に、魔法とは一切関係のない茶屋があった。

出てくるものは、ごく普通のお茶と、ごく普通の茶菓子。

訪れる者がどのようなものであれ、

どのような魔法生物であれ、

あるいは、どのような呪文のかかった無機物であれ。

店主はおだやかに微笑んで迎え入れる。

「いらっしやいませ。当店へようこそ」

これはそうした、魔法だらけ、不思議だらけの場所のただ中で、

あくまで普通、

あくまで当たり前前に営業する、

『ただの茶屋』の店主と、訪れる客たちの、

日常の物語り。

落ちていました。 1

その茶屋の、朝はさほど早くない。

魔法小路の住人は、大体において夜を好む。

だから通りのどの店も、早朝から開いていることは、ほとんどない。

住人の時間に合わせてこの店も、昼過ぎから営業を始め、深夜まで開いている、というパターンが多い。

さすがに一晩中、ということはないが、世間一般で知られている『喫茶店』や『茶屋』の営業時間からすると、かなり遅くまで開いていると言えるだろう。

店の名前は、『ただの茶屋』。

本当は、ちゃんとした名前があった。

けれど最初にこの店にやって来た、どうやら迷い込んだらしい、どこぞの騎士は、珍しげに店内を観察し、首をひねり、しげしげと店主を眺めた挙げ句、

『なんだ。ただの茶屋か』

と、言った。

魔法小路に何か、期待していたらしい。

そこで何の変哲もない店に出くわしたものだから、思わずそう言ってしまったのだらう。

店主は答えた。

『はい、うちはただの茶屋です。
お茶とお菓子がございますが、どうなさいますか』

騎士はむすりとした顔をして、ロールケーキやスコーンを睨んでいたが、無言で席につき、出されたミルクティーと共に完食し、代金を置いて帰って行った。

その後も何人か、同じような客が訪れた。
彼らは一様に、驚いたり、呆れたりした後、決まって同じ台詞を言った。

『なんだ。ただの茶屋か』

魔法小路にありながら、魔法のまの字も出て来ない、ごく当たり前の、普通の店。

落胆しつつも、その店のお茶とお菓子を堪能^{たんのう}すると、彼らは彼らの日常に戻って行った。

繰り返されるうちに、店の名前は忘れ去られた。

店は、『ただの茶屋』という通り名で、知られるようになってゆく。

魔法小路の『ただの茶屋』。

この店に出会うのは、ハズレだと言う者もいれば、
実は、とても幸運だと言う者もいる。

その日、店主はいつも通り、日がそれなりに昇ってから起き出した。

顔を洗い、歯を磨いて口の中をきれいにする。それから古びたケトルに水を入れ、火にかける。

目覚めのお茶を入れるために。

湯が沸くまでに、髪を整える。

眠い。

そうこうしている内に湯が沸いた。ポットとカップに少し注ぎ、捨てる。

温まったポットに茶葉を入れる。

アッサムCTC。飲みやすく、扱いやすい。香りはやや弱いが、味がしっかりしているから、ミルクを入れるとちょうど良い。

茶葉の量をはかり、ポットに入れてから、勢いよく湯を注ぐ。

ふたをして、ティーコジーをかぶせ、蒸らす。

このあたりの作業は、毎日しているので、特に意識せずともできる。

時間をはかるために砂時計を置いて、さて、次はと思った時。

ごとり。

扉の方から、妙な音がした。

店主は扉を見やった。

しかしすぐに、目線をポットに戻した。

砂時計の砂は、落ち続けている。ちょうど良い蒸らし時間でカップに注ぐのが、美味しい紅茶の第一歩。

「ごろり、どたん、ざしょっ！」

「……………」

店主は顔を上げた。

「ごとり、はまあ、良いとしよう。ここは魔法小路だ。妙な呪文をかけられた郵便受けや植木鉢が、はずみながら道に行くこともあるだろう。」

「ごごと、がたがた、もしかり。」

「ずしゃあああつ、も……まあ、良いとしよう。最後のごろりとか、どたんも。」

しかし、あの雄叫びは、なんだ？

落ちていました。 2

店主は扉に向かうと、そつと開いてみた。

外は、いつも通り。怪しげな店が、一見怪しげでないたたずまいで、しかしどこことなく不穏な気配を放ちながら並び、

空は晴れているのだから、曇っているのだから、微妙な色に歪み、たまに『ぐわっつけけけっ！』と、何かの鳥の声らしきものが、どこからともなく響く。

店主が育てた花やハーブの鉢植えが、自然な感じに扉の外に並んでいるが、

自然すぎて浮いている。

いつも通りの風景だった。

一体、何かと以为つつ目線を下げると、何かが落ちていた。

人だ。たぶん。

若い女性だろう。おそらく。

そこにはややタイトなスカートの、黒いスーツに身を包み、かかとの低いパンプスをはき、地味だがセンスの良いバッグを抱えた小柄な女性が、

セミロングの髪をぐしゃぐしゃに振り乱し、泥まみれになって転がっていた。

どうやら滑って転び、地面に突っ込んだ挙げ句、目を回したらしい。

どうしたものかと思いつつ、一歩、足を踏み出しかけ、店主は動

きを止めた。

「なるほど」

つぶやくと、ポケットから小さな瓶を取り出した。

中には、色つきの砂が入っている。知り合いの魔女からもらった、妖精の呪文避けの砂だ。

蓋を開け、ぱっとその場にまきちらすと、

ばちんっ。

何かが壊れる音がして、残念そうな舌打ちが聞こえた。

「どこの子かな。だれかに頼まれた？」

そう尋ねると、こちらをうかがう気配があった。

「客への手出しは、やめてもらえないかな」

『そいつが勝手にひっかかったんだ』

しわがれた声がした。

『見ものだったけどな。そいつ、派手に滑って空を飛んだぞ』

飛んだのか、と店主は思った。

『そのあと、盛大に落っこちてたけどな』

重力の法則は、今朝も普通に働いているようだ、と店主は思った。

『あんたを転ばすつもりだったのに』

「ああ……それで、派手に扉をがたつかせていたんですか」

何だろうと扉を開けて、足を踏み出したら、つるり、となるはずだったらしい。そうなる前に、この客がひっかかってしまったのだ。

「私、何かしましたかね？」

自分は何か、妖精たちを怒らせるようなことをしたのだろうか。そう思つての問いかけだったが、それには『うんにゃ』という返事が返ってきた。

『あんたが転べば面白いだろうと思った。それだけだ』

「ははあ。ミルク、いらなんでしょうかね？」

『……』

声は押し黙った。

何か慌てたような気配があり、ごそごそ、ひそひそ、相談している。一人ではなく複数だったらしい。

『ミルク、くれるのか？』

やがて、甲高い声がした。

「今夜、置いておきますよ。裏口に」

『どれぐらい、くれるのか？』

「カップに一杯」

再びごそごそ、と話し合う気配。しわがれた声と甲高い声が、何やら話し合ったあと、

『何をしてほしいんだ？』

『そうだ。何をしてほしいんだ？』

と、尋ねてきた。

「うちに来るお客さまが、気持ちよく店に入れるよう、出てゆく時にも安心して行けるよう、いたずらはしないでくれるかな」

そう言うと、またもや、ごそごそ、と相談する気配。
やがて、相談はまとまったようだった。

『わかった』

『わかった』

『わしら、いたずらしない』

『玄関守る。客も守る。店主も守る』

『だから、ミルクよこせ』

『ミルク。今夜、用意しとけ』

そう言いおくと、ばさばさ、と何かが羽ばたく音がした。一斉に、そこにいたらしい何かがいなくなる。

何の妖精かわからないが、立ち去ったらしい。

「私の事までは考えていなかったのだけど……ラッキー？」

ミルクは忘れず裏口に置かないとな、と思いつつ、店主は倒れたきり、ぴくりともしない客に、改めて目を向けた。

うつ伏せで大の字になり、ばったり倒れたまま動かない。

妖精の話だと、かなり盛大に転んだようだ。頭を打ったりしてい

ないだろうかと、店主は心配になった。

ステップを降りて、倒れている女性客の前に膝をつき、

「お客さま？」

と声をかけた。

返事はない。

店に運んだ方が良いか、しかしあまり振動を与えるのも、と考えていると、

ぐづぐづぐづ。

という、音がした。

「
……」

無言の店主。

無言の倒れたままの客。

しかし客の耳は、真っ赤になっている。

咳払いをしてから店主は、もう一度声をかけた。

「あの……お客さま？」
「……」

客は動かない。

「うちは、まだ開店していないんですが……」
「……」
「たまたま、朝食を作ろうと思ってまして」
「……」
「紅茶をいれて、蒸らしてまして」
「……」
「昨日の残りのベーグルで、サンドイッチを作ろうとしていた所だったんですよ」
「……！！！」

ぐぐぐ……つつ。きゅるきゅる。

聞き間違えようのない、腹の虫の音。

「せっかくだから、お出ししようかなと思っ……」
「ありがとうございますっ！今すぐ入ります入れて下さいってか食べさせてくださいいいいい……っっっ！！！」

がばっ！ と顔を上げるとその女性客は起き上がり、店主の腕を

つかんで叫んだ。
鬼気迫る様子だった。

自己紹介と、死んだふり。 1

女性は、ティラミスと名乗った。

「会社に行こうとしてたんですよ。なんかでも、ぼーっとしてて、疲れがたまっていたのかなあ？」

いつも曲がる角を間違えて、反対に曲がっちゃったんですよね。そしたら、迷っちゃって。

焦るし、お腹すくし。朝ごはん抜きだったから。戻ろうとしたけど、来た道もわからなくなって。

コンビニ探してもないし。どこかのお店に入って道を尋ねようって思っても、この辺りのお店、敷居が高そうで、入りにくい雰囲気です。

アンティークとか、高そうなものばかりじゃないですか。困ってたところで、ここ、見つけて。転んじやっただけどつ。でもよかった、人がいてくれて〜！」

以上は、とりあえず店に入ってもらい、おしほりを手渡し、彼女が泥を落としている間に大急ぎで作ったベーグルサンドといちごを皿に盛り合わせて出したところ、猛然と食べ始めたティラミスが、語ったことだった。

すごい勢いでばくついている。よほど空腹だったのだろう。

「はぐはぐ、コレ変わった味するけど、なにはさんでのの」「チーズとバジルの葉、レタスだけです」

「んぐんぐ、でもなんか味が違う」

「ハーブを漬け込んだオリーブオイルを塗りましたから、それでじゃないですか」

「むぐんぐ、そう？ んゝもう、なんでも良いや、おいしい！」

「ありがとうございます……あの、ゆっくり嚙んで下さい」

どうやら何も知らず、魔法小路に迷い込んだ客らしい、と店主は見当をつけた。

妙な店に入らなくて良かった。中にはかなり、たちの良くない店もある。何気なく手にした品物から知らずに呪詛をもらい、ひどい目にあう『迷い客』の話は、ここでは珍しいものではない。

入りにくいと感じた、というのは、本能的なところで危機を察知し、回避したのだろう。

この客は、意外と運が強い。本人は気づいていないのだろうが。

「んん、お茶、お茶……」

そうこうしている内に、ベージュサンドを喉に詰めたらしいティラミスが、慌てながらカップを手に取った。一気に飲み干す。

アイスティーではない。ホットティーだ。普通、一気に飲むようなものではない。熱さで喉がびっくりしてしまう……のだが。

「ぐくぐくぐく……ぷはあっ！

親父がビールを飲み干した時のようなアクションを入れながら、

ティラミスはあっさり、まだ熱いはずのお茶を飲み干した。

「はあゝ、おいしかったゝ！」

しゃべりながら食べている間に、飲み干せるだけの熱さになっていたらしい。

そういえば、今朝の気温は低かった、と店主は思った。店の中も、まだそれほど暖まっていはいない。そのせいもあるだろう。本当に、いろいろと、運が強い人ようだ。

「お茶はまだ、ありますよ。もう一杯、いれましょうか？」

今の飲み方では、味も良くわからなかったのでは、と思って声をかけると、

「お願いします！」

と、満面の笑みつきで返事があった。

ティラミスに出したのは、アッサムで作ったチャイだった。

店主が最初、自分用にいていた紅茶は、この騒ぎで蒸らし過ぎ、濃くなり過ぎてしまっていた。それで紅茶液を手鍋に注ぎ、ミルクと共に軽く煮込んでみたのだ。

分量がかなりいい加減になってしまったが、自分の朝食用にするつもりだったので、大雑把でも良いか、ぐらいの気持ちだった。

ティラミスには改めて、新しく入れ直すつもりだったのだが、なぜか店主と同じものを！と主張され、出す羽目になった。店主としては、客に出すお茶としては少々不本意だったが、ティラミスはそのお茶を！と言って譲らなかった。

「ん、ホントにおいし……お茶ですよねコレ」

自分用にも、ベーグルに適当にチーズをはさみ、軽く炙ったものを皿に乗せていた店主は、食べ始めていた。手鍋の中のチャイをティラミスのカップに注いで渡し、残りを自分用にしている。

客と同じテーブルに着くわけにはいかないのに、厨房近くの台に皿を乗せていた。そこで食べていると、ゆっくり飲んで味わっていたらしいティラミスから、そんな声がかかった。

「紅茶です」

「なんだか濃厚な味。紅茶って、もっとしゃばしゃばしてるでしょ。なんで？」

「煮込み紅茶だから、ミルクの味が出たのでしょ」

「煮込み？ お茶を煮込むの？」

「チャイと呼ばれるものは、手鍋で作ります。煮込むとミルクが馴染んで、濃厚な味になるんですよ」

「ふん。ミルクって、コーヒーに入れるあれ？ 白いっちゃい

カップみたいなのに入ってる、たらつとたれるやつ」

「いえ、普通の牛乳です。コーヒーフレッシュは、あれは油から作られていますから。正確には、ミルクではありません」

「えっ、そうなんだ？」

ティラミスは不思議そうに、カップの中の紅茶を見つめた。

「紅茶に牛乳……って、普通にミルクティーよねえ。でもこんなの、飲んだことない。すごくコクがあるんですけど。」

ココアですって言われたら、そうなんだって思いそう」

うーん、とうなりつつ、一口。

「いや、絶対違うでしょ、これ。何かまぜてあるでしょ。紅茶じゃないって」

「紅茶です」

店主は苦笑気味に答えた。

「使っている茶葉が、味の強い種類のものなんですよ」

「え、でも」

「作っているところ、見せてあげましょうか？」

「えっ、ホントっ？ 見たい……って、や、そうじゃなくて」

思わずという風に身を乗り出したティラミスだったが、ベーグルサンドをかじる店主を見て、あっ、という顔をした。

「ごめんなさい、店主さん。朝ごはん、食べちゃって下さい。わたしのことは気にしないで。開店前にお邪魔するなんて。いろいろ準備もあるのに……」

「ん？ あ、かまいませんよ。うちは、それほど繁盛しているわけではないので。のんびり食べて、それから準備をするつもりでした。泥だらけのお客さまを、そのままにはしておけませんし。

打ち身だけですんで、良かったですね」

店主は笑って答えた。

「あう、はい。盛大にすつころんだ割に、すりむいたぐらいで、何だか申し訳ない気分です」

ティラミスはちよつと、小さくなって答えた。

「良かったじゃないですか、それだけで。声をかけても倒れたまま動かないので、あの時は心配しました。

本当に、大丈夫なんですね？ どこかまだ痛むとか、そういうところはないですか？」

全く動かなかった当初を思い出し、店主が言つと、ティラミスはなぜか、ますます小さくなった。

「だいじょうぶです……あの。あれは。動けなかったんじゃないんです。あの。動かなかった、んです」

うつむいて、赤くなっている。

「動かなかった？」

「はい」

「やはり、どこかを痛めて……？」

「いえあの、そうじゃない、です。あの。あの時、わたしは、」

ティラミスは顔を上げた。そうして拳を握りしめると、真っ赤な顔をして言った。

「死んだふりをしていたんですっ！」

「……」

なぜに。

自己紹介と、死んだふり。 2

「死んだふり」

「はい」

「なぜとお尋ねしても、よろしいでしょうか」

「あう、えと」

神妙な顔のティラミスに、つられて店主も神妙な顔で尋ねた。ティラミスは、あうあうと口の中で何か言っていたが、やがて、がくりと肩を落とした。

「えと、つまり。転んでしまいましたので」

「はい」

「起き上がるうとは思ってたんですが」

「あ、腰か背中を強く打ってしまったのですね」

それは起き上がれないだろう、と思って店主が言くと、「いいえ」という言葉が返ってきた。

「あの、確かに転んだ当初は痛かったんですが。なんだか、途中で、体が軽くなってですね？ 痛みがなくなったと言うか」

それは、と思い、店主はふと、妖精たちのことを思い出した。それほど悪いものの感じはしなかった。

盛大に転んだティラミスを見て、やりすぎたと思ったのかもしれない。

すりむいただけで済んだと言うのも、そのうちの誰かが、傷を治すような術を使ったのだろう。

「それあの、起き上がろう……とは思ったのですが」
「はい」

ティラミスは小さくなった。顔がますます赤くなっていた。

「誰かがその……やって来た、ので。あの。店主さんが。えと。誰かと話している？ 風でもありましたし」
「はい」

ああ、あの会話は聞かれていたのか、と店主は思った。妖精たちの姿は見えなかったはずだ。この小路のことを知らずに入ってきた客なら、宙に向かって会話する、変な人だと思われたのかもしれない。

「それあの」
「はい？」

ティラミスは、しばしうつむいていたが、やがて勢い良く顔を上げて叫んだ。

「すつ転んで大の字になってるわたしを目撃されちゃったわけじゃないですかっ！ 大勢に！

むっちや恥ずかしいって言うか、恥以外のなにものでもないですよっ！

だからとりあえず、死んだふりしとこうと思ったんです怪我とか全然なかったんですごめんなさい……っ！」

「……」

だから、なぜ死んだふり。

何を言うべきか迷った店主だったが、真つ赤な顔で、やりとげた！ と言わんばかりにこちらを見ているティラミスを見て、突っ込むのはあきらめた。

と言うか、何を言うべきかわからない。

だからとりあえず、こう言った。

「クマに出会ったら死んだふり、というのは迷信ですから。それ、やったら、逆に命が危ないですからね」

「えええっ！ そうなんですかっ？」

「そうです。それよりは、囷になるような荷物を目につく所に投げて、クマの注意をそちらに向けてから、ゆっくり歩いて逃げて下さい。走ると注意をひいてしまいますから……ええと、とにかく。

怪我がなくて良かったです」

これはスルーと言うのだろうか。と思いつつ。

「はいっ！ いろいろ詳しいんですね、店主さん」

ティラミスはしかし、そうは思わなかったらしい。うれしそうに笑って言った。

天然。

という言葉が店主の頭に浮かんだ。

「あああ、でも恥ずかしかった……他にいた人たちも笑ってたんじゃないですか？」

「いえ誰も。大丈夫ですよ、そんなにひどい格好ではなかったですから」

「良かった……あ、店主さん。あの、良かったら、こっちで食べてくださいませんか。ちょっとこれじゃ話しづらいし、一人でテーブルに座っているのも、なんだか気づまりで」

「そうですか？ では、そちらでお茶を一緒にしましょう」

ベーグルサンドは、ほとんどなくなっていた。店主は、最後の一口を咀嚼すると、自分用のナプキンで口元をぬぐい、カップを上げた。

客に出す薄手のものとは違い、少しぼってりとした、古ぼけたカップである。

受け皿と共にそれを持って、ティラミスの座るテーブルに向かって歩く。

ことり。

テーブルにカップを置くと、店主は席についた。向かい合うようにして座った店主に、ティラミスは軽く頭を下げた。

「改めて、ありがとうございました。泥を落とすのにタオルやおしぼり、貸して下さって。怪我の手当てもしてくれて。

ティラミスです。この近くの会社に勤めています」

「^{べに}紅です」

店主も会釈して答えた。

「べに？　さん？」

「くれない、と書いて、べに。紅茶の紅の字」

店主が宙に指で書いて見せると、ティラミスは、ああ、という顔をした。

「口紅の赤のルージュ、情熱のサンバの燃える赤ですねっ！」
「……」

そのたとえば、どうよ。と、店主は思った。

「できれば、紅茶の紅で覚えていただければ」

「そうですか？」

「自分が真っ赤な口紅つけて、サンバでルンバな踊りをしている姿を連想してしまいますので」

「サンバでルンバ……」

なぜかティラミスは、衝撃を受けたような顔をした。

「あああ、ダメです、店主さんはそんなこと言っちゃダメ〜ッ！

サンバでルンバだなんて、イメージがっ！

止まれ！ 止まるんだ、わたしの頭！ 踊る店主さんを想像しちゃダメ〜っ！……」

うん。

やっぱりこの人、天然だ。と、店主は思った。

レッツ、リフレッシュなリラックス。 1

「それで、お腹は満たされましたか」

ひとしきり騒いだ後、落ち着いたテイラミスに、店主は改めて問いかけた。

「はいっ、美味しくって！ まだまだ食べられますっ、……って、えっと、ねだっているわけじゃないですから！」

思わずという風に言ってしまい、それからテイラミスは赤くなっ

「えーと、ほんと、ここのお店のファンになっちゃいました。あの、他にもあったら、お昼ごはん用に、買っっていても良いですか」

店主はちょっと、困ったような顔をした。

「気に入っていただけたようで、良かった。でもこれは、店のメニューというわけではないですよ。残り物で適当に作ったので……」
「えっ、でも美味しかったですよ。何だかこう、なつかしいような、

でも食べたことがない味でした」

どっちだ、と店主は思った。

「まったりのんびりリラックスする、やる気出るぜ！ な味でした」！

「いろいろ矛盾していませんか、それ」

リラックスとやる気が出るのは、正反対ではなかるうか。

「えっと、ええっと、んーと……なごみ！ なごむ味！ で、リフレッシュ！」

何やら必死な様子で言うティラミス。

「それで元気であるし、ほんわかリラックスもするし！ だ、ダメですかこの説明じゃ」

「いえ、まあ、……ありがとうございます」

あまりに必死な様子なので、店主もそれ以上突っ込むのをやめた。

「ずいぶん、気に入って下さったんですね。うちはどっちかと言

うと、ケーキやクッキーが主なんです……」
「ケーキも食べたい」

思わずという風につぶやいたティラミスに、店主は笑いだしそうになり、何とか抑えた。

「ふっ、く、開店はまだ、ですが。クッキーがあつたはずです。持つていかれますか」

「クッキー……」

「ジンジャークッキーがあります」

「ジンジャーって生姜^{しょうが}？ 生姜の入ったクッキーって美味しいの？」
「試食をどうぞ」

笑って店主は厨房の方へ行き、砕けたクッキーを皿に乗せて戻ってきた。

「形が悪くてお店に出せなかった分です。つまんでみて下さい」
「ありがとうございます。ん？ んん？」

ぱくり。もぐもぐ。

「んん？ あま……いのにぴりつと刺激が後から来るっつ。でもクセになりそう」

美味しい！ とティラミスは満面に笑みを浮かべて言った。

「生姜は体を温めますから、体調を整えるのには良いですよ。女のかたは、体が良く冷えるでしょう」

店主が言つと、ティラミスは真面目な顔になり、頷いた。

「そうですね。そうなんです。冷えるんです。ツライんですよ」

何やら深刻な顔になる。

「足元から冷えてくるというか。若いころには平気だったのに、最近、疲れやすくて、冷えやすいと言っか」

空気がずん、と重くなった。

「ツライのが腰にきて、肌も荒れ放題だし……」

だんだんうつむいてくる。

「疲れは全然取れないし。なんか、いろんなものがダメダメな感じで。どうしようって思っても、どうしたら良いのかわからない。」

髪がばさばさで。肌がぼろぼろで。一所懸命やってるのに。怒られてばかり。何にもなってるない。なんでだろ……」

ティラミスは涙目になっていた。空気はどんよりとなってしまっている。

ころころと表情の良く変わる、にぎやかな人物だと思っていたのだが、そういう人物がこんな風にどんよりし始めると、周囲に及ぼす影響も、かなりなものとなる。

どうしたものか、と店主は思った。

レッツ、リフレッシュなリラックス。 2

男性と女性では、ものの見え方、音の聞こえ方、そして思考の筋道の通り方が、かなり違う。

男性の視界は足元から、一直線に伸びている。

女性の視界は横に、百八十度に広がる。

男性は、同時に、一種類か二種類ぐらいの音や声を聞き分けることができないうが、

女性は、数種類の音を聞き分けることができる。

これらのことから、男性の思考は、一点に集中し、直線的になることが多い。ゴールに向かって条件をそろえ、収束する方向に向かう。

つまり男性にとって、『考える』ということは、ゴールに向かうよう、思考の筋道を整えて一本化する意味を持つ。

それに対して女性は、平行した思考を同時進行で行う。『考えながらしゃべる』ことを当り前に行い、関連する事項についても平行して考え、しゃべることで、それらをまとめようとする。

また、女性は感情によって記憶する。

つまり女性にとって『考える』とは、その瞬間の自分の感情がどうであるかが最も重要なのであって、しゃべっている事の筋道は、どうでも良いことが多い。

ティラミスがうつむいている。店主は、黙って彼女の話を聞いていた。

「もうね、疲れちゃうんですよ。いろいろ。なんだろうな。がんばってるつもりなのに。やってもやっても、先が見えなくて。

体調崩れると、がくつと落ち込むし。学生のころには平気だったのに、徹夜なんかしたら、もう、がたがた。

でも何だかやる事だけは、いっぱい溜まってて。なんなんだろう、わたし、なにしてるんだろうって……毎日」

こういう時、女性は、しゃべりたくてしゃべっている。

助言が欲しいわけではない。

もやもやとした自分の中に溜まっているものを、どこかで吐き出したい。

そう思っ、て、いろいろ口になっている。だから、助言を求めているわけではなく。

単に、相手に聞いて欲しい。そんな状態だ。

相手に解決してもらいたいわけではない。

ただ、自分が疲れていると、傷ついているのだと、相手に知ってもらいたい。それだけなのだ。

ティラミスもそんな状態だった。

店主は、特にコメントをはさまず、相手のしゃべるのに任せていた。この状態の女性に何かコメントをしても、余計にストレスをかけてしまう。彼女は、しゃべりたいから、しゃべっている。

だから、しゃべらせた方が良い。店主はそれを、知っていた。それに、自分は彼女の事情には部外者だ。

いわば、通りすがりの人間に過ぎない。

身近な人間には吐き出せないような事も、彼女は口にするだろう。それは、あくまでも、自分が通りすがりの人間に過ぎないからだ。

自分の生活に直接関わる人間ではないから、逆に安心して、自分の事情を話せる。どの時代でも、信頼される酒場のマスターや、居酒屋の女将がいるが、

彼らが信頼されるのは、そうした人々の話を、何も言わずに聞く係を引き受け、また聞いた話を外に漏らさないというスタンスを、貫いてきたからだ。

「朝起きると、ああ、またかつて思っんですよ。また一日が始まるのかって。

髪はうまくまとまらないし、顔はなんだかむくんでるし、何をしても、何を見ても、代わり映えしなくて、いつもおんなじで。

化粧はどんどん厚くなってくるし、今朝なんて、爪が逆むけしちやって、だから、

ダメダメなんです、もう嫌なんです、わたし、自分が自分にいるの、やんなっちゃった……」

はああ〜っ、と大きくため息をつく、ティラミスは、がっくりと肩を落としてうなだれた。

髪の毛と顔のむくみと、逆むけ。

なぜそれが、自分が自分でいるのが嫌になる原因になるのか。聞いていると謎ではあるが、本人は真剣だ。

それに、そういう小さなダメージの積み重ねが、ある時どつと、大きな重みとして感じられて、人を追い詰めてしまう事もある。そのことも、店主は知っていた。

店主はうーん、と思ってから、

「ありますよねえ、そういう時……」

と、言った。

レッツ、リフレッシュなリラックス。 3

「やってもやっても、何にもなっていないような、同じ場所ですつと足踏みしているような、

全然前に進んでなくて。でも気持ちばかり焦ってしまふ。

そんな感じじゃないですか？」

「あつ、そう！ そうなんですっ！」

がばつ、と顔を上げてティラミスが言った。

「店主さんも、そういう事あったんですか」

「はい、それなりに。でもそういう時と言うのは、必要があつてそうなくてもいるんですよ」

「必要？」

首をかしげたティラミスに、店主は苦笑した。

「最中にいると苦しくて、他がわからなくなりますが。

通り抜けてみれば、わかるんです。必要な状態、必要な時でもあったと。

前に進めない、足踏みばかり繰り返しているような状態と言うのは、今の自分を見直す時期に来ている、という事なんです」

「見直す？」

「自分のやり方や、生活や。いろんなもの。

仕事に関してなら、新入社員と、責任ある立場の社員とでは、仕

事のやり方が違うでしょう。

新人なら許される事も、責任者なら許されない、そういう事はたくさんある。

今までなら、それで通ってきたことが、通らなくなる。それは、責任を持つ人間として、周囲が認め始めたということです。

だから、自分を振り返って、

今まで、どんな事をしてきたのか。

何をして、何をしてこなかったのか。

それをした事で、周囲にどんな影響を出して来たのか。

点検する時、というのが。誰にでもあるんです。

ティラミスさんも、たぶん、そういう時期に来ているのだと思いますよ」

「点検……」

「生活なら、ちょっと習慣を変えたり、食べるものに気を使ったりすることで、肌の状態がずいぶんと改善されたりしますね」

「えっ、そうですかっ！」

いきなりティラミスが身を乗り出してきた。目がらんと輝いている。すごい食いつきだ。

「そう言えば。店主さん、肌キレイですよねっ！」

「……………どうも」

「そっ、その、うるおいお肌の秘密ってなんですかっ！ えええええ、こうして見るとキメ細かいつ！ 白いつ！ 何なのこの肌っ！」

手を伸ばされ、思い切り、顔をなでまわされた。

「何なのと言われましても……、いえ、食生活気をつけて、……ちよ、ちよつ、落ち着いて下さい。何だったら、化粧水の作り方とか教えますから！」

「ラッキー！」

拳を握ってガッツポーズをするティラミス。

いやもう、すごく元気だ。さっきまでの落ち込みぶりは、どこへ行った。

と、店主は思った。

「つまり、パックにするなら、緑茶！」

化粧水にするなら、ハーブをりんご酢に漬けこんで。それを水で割るのね！ 酢って、臭くない？ ええ？ ブリーチ効果で色白に！？ それはやらないと！！！！

え、スギナとかも？ 化粧水にできるの？

オリーブオイルにカモマイル？ ハーブ屋さんだけじゃなくて、薬局の健康茶のコーナーにも置いてるのね！ よしっ！」

ティラミスが、メモを取りまくっている。

「緑茶は割と万能ですね。日焼けのケアにも使えますし。パックは、カオリンなどのクレイ（泥、土）素材で作るのが一般的ですが、小麦粉で作っても大丈夫ですよ」

店主が言うのを、またメモする。

「ふふふふふ！ これでわたしも、色白美人~~~~~！」

すごい迫力だ。

気を取り直して、店主は、ティラミスの手を取った。

「ええと、では……ちょっと失礼しますね。ああ、やっぱり。手の先が冷たい」

指先を軽く握る。

「逆むけって言ってましたよね」

「はい」

「指って、意外と疲れがたまりやすいんですよ」

「え、そうなんですか」

「手をマッサージする、リフレクソロジーのお店とかあるでしょう。あれも、手が疲れやすいのがわかっているから……あとは、足もね。けっこう、疲れがたまる」

店主はそれから、ティラミスの後ろにまわり、頭を軽く触った。

「ここも凝ってますねえ。これは、気の巡りが悪くなるはずだ」
「えっ、えっ、頭？ あたまって、こるの？ 肩こりみたいに？」
「凝りますよ。インドでは、頭をマッサージする健康法が、昔から伝わっています。アーユルヴェーダと言って……ああ。肩もがちがちだ」

これは意識がマイナス方向に行きやすくなるだろう、と店主は思った。体中が常に、緊張している状態だ。

「頭の後ろに、こぶみみたいなものができてます」

「えっ？ こぶ？」

「自分ではわかりにくいと思いますが……それが頭の、こりの部分です。」

ちよつと手を」

店主はティラミスの手を取ると、頭の後ろの部分に触らせた。

「ここですが」

「んっ？ んんっ？ 良くわからな……ん？ あれ？」

ティラミスは妙な顔をしていたが、おや、という顔になった。

レッツ、リフレッシュなリラックス。 4

ぶしゅーっ。

……と、何かがティラミスの頭から出て行くのが、見えた気がした。

ティラミスは、テーブルに突っ伏した状態で、先ほどから、「ひよひよひよ」とか、「ひわわ」とか、妙な声を上げている。

「大丈夫ですか」

「大丈夫、じゃ、ないねす……」

うひい、とか何とか言いながら、ティラミスが起き上がった。

「ああああ、あたま、あたまがどーっと流れて。いいい、今もしびれてますう」

「しびれましたか」

「正座したあと、足がしびれてるみたいな、頭がそんな感じで。何かがどーっと流れたああああ」

涙目になりながら、おそろおそろという風に、自分の頭を触っている。

「相当、こつてましたから。一気にリンパや血流が流れたんでしょ。ちょっと静かにしていたら収まりますよ」

「店主さん……紅さんは、何か、そういうのやってた人なんですか？」

「いいえ？」

店主は、にこやかな顔で答えた。

「これは単に、趣味です」

「趣味って、趣味って」

ティラミスはなぜか、涙目だ。

「こつてるなあ、という人はね。大概、自分では気がついてないんですよ。」

その流れを良くしてあげると、今のティラミスさんみたいに、しびれた状態になるんですね。

それ見てると楽しくて」

わきわき、と店主が指を動かす。

「何か間違ってる〜!」

いや〜! とか何とか言いながらティラミスが叫ぶ。

「あはは。もう大丈夫じゃないですか? 頭、ちょっとはスッキリしたでしょう」

「え、あ、」

きょんとした顔になってから、ティラミスは首をかしげた。

「ホントだ。何だか頭が軽く……?」

「気の流れが良くなったんです。リンパとかもね。ただ、根本的な解決にはなっていないので、軽い運動を心がけて、体をほぐしたら良いですよ」

「え?」

「背骨や腰骨の辺りとか、緊張がひどい。ずっと同じ姿勢でいるんじゃないですか?」

「え、……ああ。一日中、デスクについて座ってるから……」

「一日十分でも良いので、ヨガやストレッチをすると、気分も前向きになりますよ。」

で、指ですが……ちょっと待ってて下さいね」

店主は一度、厨房の方に引っ込んでから、湯を張ったたらいとタ

オル、何かの入った綿の袋を持ってきた。

「アレルギーとかあります？」

「え、ないです」

「失礼しますね」

袖をまくると店主は、綿の袋を湯の中に入れ、自分自身も湯の中に手を入れた。袋をもむと、白い成分が出てきた。

「これ、なんですか？」

「オートミールです」

「オート……って、食べるやつ？ 昔、何かの童話で読んだけど。確か、麦のおかゆ……」

「肌に良いんですよ」

さらりと言うと、店主はさらに袋を揉んで、白い液体でたらいを満たした。

「ここに手を入れて。熱過ぎませんよね」

「え？ え？ はい、大丈夫です」

「しばらくそうしていて下さいね」

そう言うと、店主は厨房の方に戻っていった。残されたティラミスは、白い液体を見つめた。湯の感触がとろりとしている。入浴剤

を入れたみたいだ、と思う。

おそろおそろ、湯をかきまぜてみる。微かに水音をたてて、小さな波ができた。手が、たらいの中の布袋に触れる。

触って揉んでみると、まだ中から、とろりとした白い液体が出てくる。

「食べ物、こんな風に使うんだ……？」

「食べて大丈夫なものは、肌につけても大丈夫ですよ。もともと、化粧品は、外用の医薬品から発達してできたものです。

エジプトの壁画にある、目のまわりのアイシャドーは、虫よけの薬でした。食べたり飲んだりできるハーブは、薬としても処方されました。

そうして医薬品は、食べ物から作られることが多かったんです。野菜のキャベツは、元々薬草だったんですよ。果物のりんごも。東洋でも、食事が体を作る薬だという思想があるでしょう？」

つぶやくと、店主が戻ってきてそう言った。手に油のびんと小さなめのボウル、マグカップ、湯気を出すケトルを乗せたトレイを持っている。

「はあ。あの、でも。さっきの緑茶のパックを聞いた時もあったんですが、……なんだか、食べ物に悪いような気がするんですけど……」

「『もったいない』の思想ですね。大切な感覚だと思いますよ。化粧品や、こうしたものに関しては、食べて不調を治すか、肌につけて不調を治すか……それだけの違いだと思います。

疲れを取るのに柑橘類を食べたりするでしょう？」

「え……つと。レモンの蜂蜜漬けみたいな？」

「ええ。レモンのクエン酸、ビタミンC、それに蜂蜜の糖分でのエネルギーの補給。」

手軽で簡単にできる、疲労回復の食べ物ですよ。

そこで使われている蜂蜜は、ちよつとした塗り薬として使われてきた歴史があります。殺菌作用が多少、あるので……唇が荒れた時に、塗ったことはありませんか」

店主がテーブルにトレイを置く。ケトルから、熱がこちらに伝わってくる。びんの中の油には、何かのハーブが入っていた。

「え？ どうだったかな……あ、でも、おばあちゃんが昔、リップクリームない時にやってたような」

「油分が足りなくて皮膚のバリアが低下したなら、油のあるものを塗って補強する……蜂蜜を唇に塗るように。」

皮膚の表面の油がうまく排出されない時には、吸着力のある素材を塗って、皮脂を取るようにする……陶土や小麦粉を練って、肌につけるように。

食べ物に体の内部を癒してもらって、体の外側も癒してもらう。

昔は、その発想が当り前だったんです。薬は、自然にあるものから作るしかありませんでしたから。

そうして使い終わったものは、土に帰す。

それでバランスが取れていたんですよ」

「……はあ」

なんだか良くわからない。大切なことを言われている気もするの

だが。

店主はそんなティラミスを見て、小さく笑った。

レッツ、リフレッシュなリラックス。 5

「わたしも使い終わった後のものは、コンポストに入れて堆肥たいひにしています」

「堆肥？」

「お茶や料理に使うハーブ、育てているので。肥料に使っています。堆肥にすると、ゴミが少なくなるし……ここで小さな世界が循環していると、実感したりもしますよ」

店主がボウルに湯を注ぐ。次にマグカップに油を入れた。ハーブの入っている油だ。別の小瓶から、黄色い油も加える。それから店主は、マグカップの中の油をスプーンでかきまぜた。

そのマグカップを、湯の入ったボウルの中にそつと置く。

一連の作業はなめらかに行われて、ティラミスはなんとなく、目が離せなかった。

「それ、何をしてるんですか」

「湯せんしています。ちょっと温めた方が良いので」

温まった油から、ふわん、とほんのり、甘い香りがした。

（あ、いいニオイ……）

ほのかに漂う香りに、ティラミスは、少しなごんだ。

「それって、何の油なんですか？」

「最初のが、バラとラベンダーを漬けたオリーブオイル。アレルギ
ーを起こす人の少ないハーブです。」

後から加えたのは、カレンデュラのオイルです。キンセンカって
言ったらわかりますか？ 黄色い菊科の花」

「お仏壇に、良く供えてある花かなあ」

「それです。花の色素にカロチンがあって、ビタミンAが豊富なん
です。昔から、傷の手当てに良く使われてきました……ビタミンA
は、皮膚の損傷を治したり、血管を強くするんですよ。油に漬け込
んで、ひたすら湯せんして作るんで、ちょっと大変なんですが。」

……じゃあ、そろそろお湯から手を出して」

やわらかくうながされ、ティラミスは湯から手を出した。タオル
を渡されたので、濡れた手を拭いていると、

「力を込めてこすらないで。優しく。そつと、水分を吸い取らせて
下さい」

と、言われてしまった。自分でも気がつかないうちに、荒っばく
拭いていたらしい。

オートミールの湯に浸かっていた手を、軽くこすりあわせてみる。
湯につけていた肌は、しっとりしていた。何となく、すべすべにな
っているような気もする。

「オートミールって、入浴剤になるんですね……」

「西洋は、硬水こうすいが多いので」

「香水？」

「硬水。硬い水、です。外国へ旅行した人が、生水を飲んでお腹を壊したと、聞いたことはありませんか」

「えーと……そうだった」

ティラミスは首をかしげた。言われてみれば確かに、生水を飲むとお腹を壊すと聞いたことがあるような、ないような。

「日本はほとんどが軟水なんすいですが、海外では、硬水が一般的なんです。カルシウムイオンやマグネシウムイオンが多くて……そういう水をたくさん飲むと、下痢をしてしまうのですよ。

触った感触も硬いので、肌への負担が大きい。肉などの煮込み料理には、適しているのですが。

それで、湯を柔らかくするのに、いろいろなものを利用してきたのでしょうか。オートミールや、油や、土を混ぜて」

「土？」

「イオンを反応させて、カルシウムを沈殿させるんです。そうしたら、水が柔らかくなる。灰とか、炭酸塩とか、アルカリの強い物質。泥炭が混じると、湯が柔らかくなっていたようです。水の色は茶色になってしましますが」

ふうん、とティラミスはつぶやいた。良くわからない。

「硬水って、肌に良くないんですか？」

「体を浄化する作用がありますから、一概にそうだとは言えませんが。下痢をするのは、体のなかの不要なものを、外に出す力が強いからです。」

ダイエツト目的で、硬水を飲む人もいますよ。

けれど、肌の弱い人が硬水のお風呂に入ると、赤くなってひりひりするのも確かです。

お茶を淹れるのにも、味が変わってしまうので、うちではお茶には、軟水を使っています」

店主はティラミスの手を取ると、指先を確かめるように触れた。逆むけている爪の横の部分、とげのように飛び出ているささくれを、軽く押す。

「あにゃ」

思わず、ティラミスはそういう声を出していた。

「痛かったですか」

「い、いえ。ちよつとびつくりしただけ。あの？」

「どういう状態か、確かめました。お湯につけたから、ふやけて柔らかくなっている」

「あ、はい」

店主は小さなハサミを取り出すと、ささくれをちょん、と、切った。思わずティラミスはまた、「あにゃにゃっ」という声を出して

いた。

「え、えーと。今のは何を？」

「ささくれを切りました」

「それは見たらわかりますが。なんで？」

「このままでは、ひっかかって痛いでしょう？」

その通りなのだが。

「あの……、でも。そうやって切っても、またすぐ出来てしまうので……無駄と言つか。あんまり意味ないんです……」

「そうですか？」

「はい。何度も、引っ張って抜いたりしたんですが、すぐに同じところにてきちゃって……」

そこで店主は、眉を上げた。

「引っ張って抜いた？」

その表情に、何かまずい事を言ったかどうか、とティラミスは思った。

「ええと……」

「今まで、どんな治療を？」

「え、治療と言うか。ひっかかったら痛いから……あの。ピンセットでつまんで、えいやっとむしってましたけど」

店主が啞然とした顔をした。自分で言っておきながら、さすがに乱暴だったか、とティラミスは思った。

「それ、流血沙汰になったのでは？」

「あー、はい。むしった後は、よく出血してました」

「その後は、どうしていましたか」

「え、特に何も。放っておいたら血は止まるし……え、ええ？」

いきなり天を仰ぐようなしぐさをした店主に、ティラミスは慌てた。何か自分は、間違ったことを言ったのだろうか？

レッツ、リフレッシュなリラックス。 6

「出血しているのなら、それは立派に傷口ですから。手当てしてください」

店主に言われ、ティラミスは何となく、小さくなった。

「ええっと、でも面倒だし……ごめんなさい」

「面倒でも、ケアしてあげて下さい。手は、体の中でも目立って良く働いてくれている部分なんですから。時にはいたわってあげることも必要ですよ」

「はい……」

さて、と言うと店主はティラミスの右手を取って、温まった油を手にぬり始めた。

ふわん、とほのかに甘い香り。

「うーん、ほんのり、かすかにいいニオイ……って。油！ まんま油ですよ、それ？」

湯せんしていた油を、まさか手に塗るとは思っていなかったのので、ティラミスは慌てた。店主は平然として答えた。

「そうですね。全部食べられる材料でできていますから、食べることもできますよ」

「え、オリーブオイル、そのまま食べたりしないでしょ」

「ドレッシング作る時に」

「ドレッシングは市販の……はにゃ」

ていねいに指の間まで油を塗られ、くると指先で円を描くようになぞられる。

油があるからか、皮膚がひっかかることなく、なめらかに円が描かれた。

「ちょっと揉んでおきますね」

「は、」

指を引っ張られたり、指先を揉まれたり。

「にゃ、なんで揉むんですかあ」

「逆むけになってしまう原因は、いろいろありますが。マニキュアやリムーバーの使い過ぎ、ビタミン不足。あと、冷えて血流が悪くなっているっていうのもあるんですよ。」

最初に手を取った時、指先が冷えていて、硬い感じだったので…

…少し、流れを良くしておきましょう」

「あう、でも、なんで油……それならハンドクリームとか」

「昔から、傷の手当てに油を使うことは良く行われてきたんですよ。」

薬草を漬け込んだ油を、薬として塗布する。時には、普通の油を薬として塗りました。

今の日本のように、どこでも薬が手に入るような時代は、ほとんどなかった。

抗生物質が作られるようになったのは、二十世紀になってからです。薬が工場で、大量生産できるようになったのも。それまでは自然にあるものを薬とし、工夫して使用していた。

それに、台所にある材料でできちゃう方が、家事の合間にできるし、長続きするでしょう?」

店主はそう言いながら、ティラミスの指を一本一本、ていねいに揉んでいる。

「クリーム作っても良いですけどね……時間がかかるし、別に材料を買ってこないといけないんですよ。それよりは、こっちの方が簡単なので」

「へ? え? クリームって作れるの……? ま、まさか、生クリームとか!？」

自分が生クリームだらけになっている姿を、ティラミスは思わず想像していた。

「いえ、もつと長持ちする材料で作ります。油を乳化するための土や、蜜ろうを使います。ゲル化剤を使えば、軽い感触のジェルにもなりますけれど」

「は、また土?」

どうやったら、土でクリームができるのか。想像できない。
目を白黒させているティラミスにかまわず、店主はくるくるとマ
ッサージを続けてゆく。

「傷を治すのには、ビタミンCがあると早いんですよ。取ってます
？ ビタミンC」

「は？ えーと、普通にオレンジジュースとかは飲んでます……け
ど」

「ストレスが多いと、体の中でビタミンCがどんどん消費される。
一日のうち、何度か分けて、こまめに取った方が良いでしょう。

ほかに、皮膚に良いのはビタミンAやB2、B6……」

店主の手が止まり、何かを確かめるかのように、ティラミスの右
手を包んだ。

「指先、いつも冷たいでしょう」

「あ？ え？ えと、……はい」

「先ほども言いましたが、ヨガやストレッチで、体の中の気の巡り
や、リンパの流れを良くして下さいね。

手先が冷えていると、栄養も回りにくくなる。それがささくれを
作る原因になったりするんですよ」

店主の手は、温かった。

「紅さんの手、あつたかいですね。何だか……ほっとする」
「水仕事の後は冷たいですよ」

ちよつと笑つてから、店主は手を離した。ティラミスは何となく、残念な気がした。

「……って、それ何ですか！」

そう思つていたところ、次に店主が取り出したものを見て、ティラミスは思わず突っ込んでいた。店主は答えた。

「ラップフィルムです」

それは、どう見てもラップだった。

料理をレンジに入れる時に、包んだりする、あれ。

透明で、でも濡れるとべちゃつとしてしまふ、取り出す時に失敗してくつついてしまふと、あとが結構面倒な、

ご家庭に一つはあるだろう、透明なフィルム。

「どうするんですか、それ……」

「傷に巻きます」

「なんで傷口！ だだだったら、絆創膏で良いでしょう！ 絆創膏が良いです、わたし！」

「はいはい。じゃ、巻きますね」

店主はラップフィルムを適当に切ると、手際よくティラミスの指を一本ずつ、巻いてしまう。

「え、うえ、ええ??」

「手の他の部分にも巻いておきます。次は左手」

啞然としている間に、左手も同じように油を塗られ、指先を揉まれ、ラップフィルムで包まれてしまった。

ティラミスは、十本の指と手にラップを巻き付けた状態で、手をお化けのようにだらんとさせながら、呆然として座っていた。

店主はその手を取ると、タオルの上に置いた。続いて別のタオルを湯につけてしぼり、ほかほかとしたそれを、ティラミスの手の上に置く。

「あのあのあの?」

「ん、よし。しばらくそうしていて下さいね」

「えええええ?」

何がどうして、どうなった。

そう思っていると、目の前で、店主がボウルや油の瓶を片づけ始める。トレイの上に並べてひよいと持ち上げると、厨房の方に行ってしまった。

わたしはどうすれば。

呆然としながらティラミスは、ラップに巻かれた手をタオルの上に置き、座っていた。と言うか、動けない。上に乗っているタオルが落ちそうで。

美女とラップと、美味しいごはん。 1

しばらくそうしていると、「邪魔するよ」という声がした。そちらに目をやると、若い女性が戸口に立っていた。

「おや。店主は留守かね」

（おお、ボン、キュッ、ボン！）

思わずティラミスは心の中でそう言ってしまった。そこにいたのは、二十代ぐらいのスタイルの良い女性。髪はきりっとしたショートで、耳の下辺りで切り揃えられている。化粧は派手すぎず、それでいて女らしさを演出しており、クリーム色のスーツがぴしりと決まっただけで目にまぶしい。

「あ、いえ、紅さんなら奥に……」

「この時間帯には珍しい。おまえさん、あれの客かえ？」

ティラミスの返事を無視するかのように、女性はヒールの音を響かせてつかつかと歩み寄って来ると、しげしげという風にこちらを見た。

「外の匂いがしよるのう」

「は？ ニオイ？」

転んだ時の泥が、ついたままだったのだろうか、とティラミスは思った。にしても、この女性、

「ふうむ。珍しいが……まあ、ないわけではないわな。で、何をしておるのかの？」

言葉づかいが。古風と言うか。ちょっと変わってないだろうか？

「えと、あの、……転んじやって、泥だらけになったんです。で、紅さんが、あの。手当てとかしてくれて、その」

「ほー」

「なananだか、わたしにも良くわからないんですけど。あの。こうやったら逆むけに良いらしくって」

「ほほう」

あわあわしながら説明すると、女性は面白そうな顔になった。

「して、おまえさん、ここでは何を求めたのかの？」

「求めた？」

「なんぞ、対価を支払って、受け取ったのではないのか？」

「た、対価？ えと……、代金？ あの、まだ払ってません。そういえば、あのベーグルサンド、いくらするんだろ？」

厚かましくも開店前の店に上がり込み、朝御飯をいただいてしまった事を思い出して、ティラミスは慌てた。そうだ。お金を払わないと！

「あれは売り物ではありませんから、代金はいただけませんよ」

そこで、店主の声がした。厨房から戻ってきた店主が、女性に会釈する。知り合いのようだ。

「対価なしで？」

女性は、顔をしかめた。店主は苦笑らしきものを顔に浮かべた。

「いただいていません。これはお詫びですから」

「詫び？ なんぞあったのか」

「小さなひとが悪戯をしまして。こちらに迷惑をかけてしまいました」

それで意味がわかったらしい。ショートカットの女性は「ああ、」
と言ってうなずいた。

「あれらも、悪いものではないんじゃないかなあ。たまに遊び感覚でやらかしおる。呪いは、役に立たんじやったか？」

「その前に、こちらが転ばされてしまつて」

「それでか。しかし……」

女性はいち、とティラミスを見やると首をかしげた。

「外の者じゃろ」

「ええ。迷つて来られて」

「そりゃ、」

うーむとうなり、女性はい首を振つた。

「なるほど。運の良いことじゃ」

「え、えーっと？」

ティラミスには、二人の会話がわからない。ひたすら頭の周囲にクエスチョンマークを飛び回らせている。女性はい、ティラミスの方を向いた。

「迷つて来たのじゃろ、娘さん。紅どのは、面倒見が良い御仁じゃでな。転んだのは、おまえさんの運の強さがあつたからじゃ。」

「ここで転ばなけりゃ、おまえさん、道を見失つておつたぞ」

そう言われ、目をぱちぱちとする。

「えっと、……はい。紅さんには本当、良くしていただいて……えっと。ラッキーだったと思ってます」

「うむ」

「あのあの、ええっと……ところで、あなたは」

「わしのことば、おばばと呼べ」

ショートカットの美女に言われ、ティラミスは「はい？」と首をかしげた。こんなに若いのに、なぜ『おばば』？

「ニックネームのようなものです」

店主に言われ、「はあ」と相槌を打つ。でも良くわからない。

「えと……変わったあだ名、ですね？」

「おう。この名は通日も良いし、名乗りやすくもあるでな。遠慮なく呼んでよいぞ。」

して、娘。おまえさん、ここで何を求める？ まだ聞いておらんのだが」

「は」

いきなり変わった話題に、目をぱちぱちとする。困惑しているティラミスに、店主が近寄り、乗せていたタオルを取り除いた。

「『迷い客』ですよ、おばさま。酷なことを尋ねたりなさいますな」

店主が静かに言う。おばばと呼ばれた女性は肩をすくめた。

「紅どのも知っていよう。この場所は、理由もなく人を迷わせるわけではない。ここに来る者にはおしなべて、その者にとつての個人的な理由があり、その理由によって引つかかるのじゃ。」

それがここに来る大原則であり、重んじねばならぬ法則でもある」
「知っていますが。この方の場合、……ラップを外しますよ、ティラミスさん」

そう言うと、店主はラップフィルムを外し始めた。ティラミスは、自分の指を見た。油がまだ残っていて、しっとりしている。

「これ、逆むけの治療なんですか？」
「民間療法を多少、いじっただけのものです。医療行為ではありません。ですが、指先は楽になります」

店主はティラミスの手から、ラップフィルムをすべて外した。

「どうしてラップを？」

「傷口は、湿らせておいた方が早く治るんですよ」

「え？ そんなんですか？ 乾かした方が良いつてわたし、聞いてたけど……」

「『しつじゅんりようほう湿潤療法』というのが、最近、知られ出したと思いますが。傷ができる、膿が出るでしょう。あれは、傷ついた部分を保護しようと、体が出しているんです。

傷口を乾かしてしまうと、逆に治りが遅くなり、跡も残りやすいんですよ。

適度に湿らせておいた方が、回復は早くなります。火傷にアロエを使う事もあるでしょう？」

「あろえ？」

「知らないかな……、『医者いらず』と呼ばれた薬草ですが」

「あそこにあるぞい」

おばばが、店の隅にあるプランターを指さした。そこにはとげとげのある葉っぱばかりの、見栄えのあまりよろしくない植物が、でん、と鎮座ましましていた。

「サボテンかと思ってた……」

「似てはいますね。あの植物は、葉の内側に、ゼリー状の繊維を持っています。そこに水分を溜めているんです。

そのゼリーの部分を当てておくと、適度に湿りけがあつて、患部を冷やすので。ちょっとした傷や火傷には、あの植物を使うのが、昔から良く行われてきました」

「へえ……」

そうなんだー、とつぶやいていると、おばばと名乗った女性が、のんきじゃのう、と言った。

「紅どの。おまえさん、この娘さんに傷の手当ての講釈を垂れて、終わりにするつもりではあるまいの？」

「いえ、まあ……この方との会話は楽しかったもので」

「それは構わんが。客なら客として扱わねば、この娘さんにとっても良くないぞえ。店に入り、対価も払わず出たとあれば、何が、どのように反応するかわからん。

下手をすればこの娘さん、二度と戻れんぞ」

最後の言葉は低く、ティラミスの耳には届かなかった。けれど、おばばの表情から、何かあると思った彼女は、店主とおばばを見比べた。

「のう、娘さん。おまえさん、ここへは何をしに来たのかえ？ 何ぞ、欲しいものでもあったか」

おばばの言葉に、ティラミスは首をかしげる。

「欲しいもの？」

「ここに迷い込んだ時、なにを考えておったか、じゃが」

「道を間違えたかなって、焦ってただけですけど……」

「これが欲しい、というものはなかったのか？ まあ、世の中には、人にはそうおいそれとは言えない望みというものも、あるがなあ」

おばばの言い方は軽いものだったが、どこか皮肉めいた響きもあった。『人にはそうおいそれとは言えない望み』に、何か嫌な思い出でもあるらしい。

ティラミスも、さすがに気付いた。最も、何かちくりと言われたな、ぐらいで、明確なものは感じ取れなかったのだが。

「え、なんですか、それ。そんなのない……あ」

眉をひそめてそう言いかけ、そこではた、と思い当たり、ティラミスは言葉を止めた。

「なんじゃ。欲しいものがあつたのか」

「あー。えー」

ティラミスは赤くなっていた。なぜか、視線をつろつろとさまよわせる。

「あつたんじゃな。何じゃ？ 言ってみ？」

その様子に、何かあると確信したらしい。おばばが問うた。おそ

らく、それがここへ迷い込む鍵になったんじゃろな、と小さくつぶやく。

それは、挙動不審な様子を見せるティラミスの耳には入らなかった。店主の耳には入ったが。

「その、ええつと」

「何だっ たんです？」

店主がうなぐす。ティラミスは、赤い顔でうつむいた。

「いや、欲しいと言うか……、……でした」

ぼそりと言う。

「え？」

「なに？」

「だから、」

顔を上げる。

「空腹だったんです。すっごく、お腹がすいてたんですよー！」

美女とラップと、美味しいごはん。 2

その場に沈黙が落ちた。

「ああ、あゝ、そう言えば。お腹が鳴ってましたね」

店主が思わずという風に言う。ティラミスは、ぎゃー！と叫んで真っ赤になった。

「それ、言わないでくださいー！ 恥ずかしいんですからあー！」
「空腹？」

おばばが首をかしげた。

「ぬしは、贅^{ぜい}を凝らした食事を求めてでもおったのか？」
「は？ え、いいえ？ お腹すいたなあ、ちよつとぱくつとできるもの食べたいなあ、ぐらいですよ？」

ティラミスは答えた。

「だって、朝ごはんだし！ こつてりしたもの、入らないですよ。気取った食事なんて、がらじゃないし。」

紅さんのベークルスサンドとミルクティー、ほんとに美味しかったあゝ……」

うつとり。という顔で言う。おばばは、口の端をぴくぴくさせた。

「では、ぬしの、この小路を訪れた目的は。」

ごく普通の。当り前の。『ただの食事』を求めることであつたか？

ひきひきと、頬が痙攣けいれんしている。今にも笑い出しそうだ。

「『ただの茶屋』に……、求めたのが、『ただの食事』っ」
「洒落じゃないんですよ、おばばさま」

店主の言葉を無視して、おばばはげらげら笑い出した。

「そうか、ただの食事をの。いや、この店に来るはずじゃ！ うはははは！ ここは『ただの茶屋』じゃからのう。美味かったか、この食事は！」

「はいっ！ もう、すごい満足」

「そうじゃろ、紅どのは、妙なところに凝るお人じゃでな！ 一見どこにでもあるような食事にも、手は抜いておらん。はっは！」

ひとしきり笑ってから、おばばは目に笑いを残した顔のまま、店主のほうを見た。

「さて。紅どの。それではこの娘さんはすでに、目的を果たしたことになりよるぞ。

客が商品を選んだのであれば、あるじは対価を受取らねばならん。それが、どのようなものであるうとな」

「あれは、商品ではありませんよ。わたしの朝食を分けただけですから」

店主は、狼狽^{ろうたい}気味に言った。おばばは、ふふ、と笑った。

「馬鹿なことを言うでない。求めるものが、求めたものを手にしたのじゃ。立派に成立しておるわ。売り手と買い手、店と客の関係がな。

おまえさん、ここに店を出して何年になる。

客が不本意であろうと、店のものが不本意であろうと。売り買いの契約が成っておるのなら、おまえさんは対価を受け取らねばならん。何があってもな。それが、この法じゃ」

それからおばばは、何を言っているのかさっぱり。という顔をしているティラミスの方を向いた。

「娘さん。おまえさん、満足したかえ？　出された食事に」
「え、あ、はいっ。すごく元気出ました。満足って言うか、もう、うれしくて」

えへへ、と笑ってティラミスは、店主の方を向いた。

「あのね、紅さん。わたし、落ち込んでたんですよ。ほんとに。ここに来るまで。」

お腹はすいてるし、肌はぼろぼろだし、憂鬱だし……さかむけしちゃって、痛いし。もう、どようん、どようん、って感じてした。でもね、紅さん、何にも言わないで、手当てして。愚痴聞いてくれて。ごはん、出してくれて。お肌のケアとか教えてくれて。

なんだかね、それ、すごくうれしかった」

「最後の『お肌のケア』は、わしもちよつと聞きたいぞい」

おばばがぼそりと言った。

「紅さんは、商品じゃないって言ったけど。そういうの込みで、すごいプレゼントみたいな、もらった気がするの。」

おばさんの言ってること、よくわからないけど……あの朝ごはんの分の代金、お支払いさせて下さい。材料費だっとかかかってるでしょ？」

そう言って、ティラミスが手を合わせると、店主は困った顔で天井を仰いだ。

「わたしが嫌なんですよ。ああいう、適当に作ったもので対価をいただくなんて……ああ、でも、確かにそうですね……何らかのものは、受け取らないといけませんね」

おばばが厳しい眼差しを寄越したのに気付き、店主は肩を落としました。

「ティラミスさんは、どれぐらいが妥当だと思われます？」

美女とラップと、美味しいごはん。 3

「どれぐらいって？ 朝ごはんの代金？」

ティラミスは首をかしげた。どれぐらいだろう。

喫茶店などのモーニングセットは、トーストにサラダ、卵にコーヒード、五百円前後。フルーツなどが入ると、もう少し値段が高くなる。

それでもあれば、市販の食パンやマーガリン、インスタントのコーヒードを使っているから、あの値段なのだ。この店で出されたものは、一から全部、手作りっぽかった。ベーグルしかり、スパイス入りのオリーブオイルしかり。そして、あの、濃厚なミルクティー。

インスタントでは、絶対に出せない味。

見かけは普通の、よくある感じの食事だった。けれど。ていねいに作られた材料が支える、素朴だけれど豊かなあの味は。

何よりも、素晴らしいご馳走だった。

「すごく、贅沢させてもらったわ」

それでも、五百円ぐらいで！ と言いたいなあと、心のどこかでちらりと思ったが、店主のもてなしに対して失礼だと、ティラミスは思った。それでは、相手を正當に評価せず、馬鹿にしている事になる。

子どもなら、価値がわからず、まける、まけると言い張る事もできただろう。

相手のしてくれた行為に対して、感謝することなく。それを当た

り前だと受け取って、『正当な商品でないならただにしる』と言つてのける事もするだろう。実際、そういう事をしている中学生や高校生を見た事がある。

あれは、本当にみつともない。

ただにしるとこねる時点で、手にした品物の価値がまず、見えていない。それを作った人、育て、あるいは加工した人のかけた時間、手間、心の全てを否定したことになる。

それを売り手に対して主張するという事は、売り手自身をも価値がないと、低く見ていると、まともに言つたことになる。

売り手は生活のために、品物を売っている。売り手には売り手の人生があり、生きてきた、生きてゆく時間が存在する。その中で、彼らは商品を選び、買い手に届けるために努力してきたのだ。

それを、ただにしると主張することは、そうした努力の全てを否定する事になる。目の前にいる相手を、侮辱することになるのだ。

適正な値段。

これを考えるのは、当たり前なようでいて、難しい。

そのものに対して、どのように評価するか。

これには人間性が出るのだ。その人の。

三十になつても、四十になつても、その辺りがわからずに、自分に都合の良いようにとしか、考えられない人もいる。

価値と手間を考えず、ひたすら「ただにしる」「安くしる」と声を張り上げる。

そういう人は、信用されない。

経験の浅い子どもならともかく。大人がそういう態度を取ると、「この人には、どんな親切をしても、心を配ってあげても、感謝されない。かえって、もっと自分に寄越せと、まわりついてくる」と見なされる。

トラブルを起こす人として、敬遠されてしまうのだ。

（あたしは、子どもじゃないもの）

ティラミスは思った。

（大人の女性として、いろんなものを見てきた。考えさせられてきた。

だから、わかる。あのベーグルサンドに、どれだけ手間がかかっていたか。あのミルクティーが、どれだけいいねいに淹れられていたか。

紅さんは、手を抜いた、みたいに言っただけ……）

ティラミスは拳をぐつとにぎった。

「あれで手抜きだったら、モーニングセットを出してる喫茶店の半分は、お店閉めないといけませんよ！」

店主とおばが、ぽかん、とした顔で、ティラミスを見た。いきなりエキサイトした風に叫んだので、何が起きたという表情だ。

しかしティラミスは、かまわなかった。

「程よく焼けたベーグルの、かりつとした表面に、もちつとした中身！ チーズは絶品で、そしてあの、オリーブオイル！ 複雑な香りが鼻にぬける、あの、あの味！」

いちごも美味しいし、あのミルクティー！ 濃厚で、でもくどく

なくて、ほんのり甘くて、焦げたキャラメルみたいな香りがふんわり……、

夢に見る。あたし、絶対、夢に見る！ 今日の朝ごはん！ 忘れられない忘れたくない、胸の奥でいつまでも~~~~~！」

「演歌かい」

おばばのツツコミを無視して、ティラミスは叫んだ。

「中には超適当な、ひどい店もあるんですよ！ モーニングセットって、書いてりゃ売れるだろうみたいないな！

パンは生焼け、サラダはべちゃべちゃ、コーヒーや紅茶は微妙にかび臭くって、どんな管理をしてたんですか、って言いたくなる！

でもそんな店に限って、堂々とお金を取るんですよ！」

ティラミスの脳裏によみがえる、苦い思い出。

急いでいたので適当な店に入り、後悔しまくった、あの朝。

一口かじると、冷凍庫の何とも言えない匂いが広がり、溶けきれなかった氷がじゅりつと言ったパン。水切りしきれなかったらしい、べつちよりしたレタスと、ぞんざいな切り方をしてつぶれたトマト。後味がえぐいコーヒー。唯一、ゆで卵だけはそれなりだったが、それだけしか出来ていない調理というのは、どうなのだ。

トースト、サラダ、ゆで卵、コーヒー。これだけのメニューでどうして、あそこまでまずく作れたのか。何かに挑戦していたのか、あの店は。

「あれに比べたら……あれに！ 比べたら！

極楽浄土の味でした！

自信もってください、紅さん！」

「はあ」

困惑する店主。横では、「極楽浄土の味って、なんじゃい」と、おばばが突っ込んでいる。

「ですので！ あたしも気合入れて、お支払いをしたいと思います！でも、あたしも、そんなに相場とか、知ってるわけじゃないから……あ、だけど確実に。確、実、に！ 五百円よりもっと価値がありましたよ、あの朝ごはん！

うーんと、うーんと、スタバやドトールだと、セットが確か、七
百円か八百円ぐらいになるわね。違ったっけ？ だったら、千円？
ぐらいが妥当、かな」

「それでは、もらいすぎです。五百円でも、わたしは別に、」

「紅さああん！」

店主が言うのを、ティラミスはさえぎった。

「言ったよね？ あたし。言ったよね？ 自信持ってって」

「ええ？」

「ごひやくえんの。かちしかないと。作り手本人が、そんな低い意識でどうするうつつ！」

「ええ！？」

「あたしが認めたの。だから、あたしが払いたいのに！」

出費はちょっと痛いかもだけど、でも！ あたしは、価値がわかる女です！

そんな思いを込めてティラミスが店主を見ると、店主は困った顔をして、それから、負けた、という風に笑みを浮かべた。

「でしたら、八百円、いただきます」
「えゝ……」

ティラミスは、不満げな声を上げた。

「あのですね。本当に、不本意なんですよ。あれをうちの商品として、対価をいただくとするのは。

ただ、いちごは新鮮でしたし。チーズもそこそ良いものでしたから……」

「ええゝ……」
「納得してくださいよ」

困りきった風に言う店主に、おばがひひひ、と笑った。

「妙な光景じゃのう。店主は安く売らせると言い、客は高く買わせると言う」

「だって、ホントに美味しかったんだもの！ 絶対、千円以上の価値あったもの！」

「ぶー、とふくれてティラミスが言つと、店主が「ありがとございます」と礼を言った。

「朝食を望まれたお客さまに、わたしは朝食をお出ししました。ごく当り前のものを。

それを、とても価値あるものだと思めてくださった、あなたの心と言葉が、わたしには本当にありがたい。

ですが、これは譲れません……八百円。それでももらい過ぎているぐらいですよ」

「えええ……」

不満そうな顔になったティラミスだが、店主のきつぱりとした物言いに、もうこれ以上はどうにもならないと思つたらしい。しおしおとした風に財布を取り出し、千円札を一枚出した。

「あ、それじゃ、お昼の分も買つていきたいんですけど」

そこで思いついたという風に、顔を上げて言う。

「まだ開店前なので……」

「どちらかと言うと、夕方から夜にかけてじゃからなあ、この店はま、じゃが、昨日の残りぐらゐはあるじゃろ？ 値引きして売ってやつてはどうかの？」

おばが言う。店主は困った顔をした後、「固く焼いたお菓子なら、大丈夫ですかね」と言った。

「食事になるようなものは、あまり置いていないんですよ。ショートブレッドとジンジャークッキーの詰め合わせなら」

「あ、あたし、それが良いです！ さっき食べたの美味しかった」

ぱつと笑顔になったティラミスに、店主も笑みを浮かべた。

「では、ちょっと待っていて下さいね。包みますから」

美女とラップと、美味しいごはん。 4

厨房の方に引っ込んだ店主だったが、すぐに戻ってきた。手に、小さな紙袋を持っている。

「ショートブレッドとジンジャークッキーです。これも合わせて、全部で千円いただきますね」

「え、でも」

クッキーの詰め合わせは普通、五百円ぐらいしないだろうか？

「クッキーは、三枚ずつで三百円いただいています。これは昨日の残り物ですから、値引きしました」

店主が言った。ティラミスはそういうものか、と思いなおし、紙袋を受け取ると、千円を支払った。

手から手へ、紙幣が渡される。その瞬間、

(……！？)

まばゆい光が、目の前を走った。

（え、なに？）

思わず目をつぶった。光は一瞬で広がり、自分を包み、……そして消えた。

（え？ え？）

おそろおそろ目を開けると、そこは先ほどと同じ店の中。目の前には店主がおり、側にはおばあ。店の中も変わらない。

（え？ なんだったの、今の）

唖然として目をぱちぱちとしばたいていると、「どうしました？」と店主に尋ねられた。

「え、いま……えっと？ 何か光りませんでした？」
「外からの光が反射したのでしょうか」

あっさりと店主が言い、ティラミスは首をかしげた。

「外？」

「光線の加減で、車の窓や、ミラーが反射したりするでしょう？
まぶしいですね、あれ。いきなり見たら」

「あ、……そう？ えと、……そう、かも」

ミラーの反射か、と思ってからティラミスは、はた、となった。

「車……ひよわ、車っ！？ え、いま何時……あわわ、あたし、どれぐらいここに~~~~っ！」

なぜ、今まで気づかなかったのか。のんびりとした店主の対応に
思わず乗せられていたのだが。

自分は、確か、出勤途中……！

「ちちちちち、遅刻~~~~っ！」

ざーっと青ざめて叫ぶ。

「ああああ、ただ道、道まちがえ、かかか、会社はどっち！
えわわ、ケータイ！ ケータイ！ 連絡入れないと……ああああ、
怒られるつつつつつつつつ！」

あわあわしながら鞆を探し、ケータイを探して手を突っ込む。しかし、こんな時に限って見つからない。

「うわあ、うわあ、なんでこんな、なんで忘れてたりしたの、あたしってあたしってば~~~~っ!」

鞆の中をさがさせながら、ティラミスは叫んだ。

「ティラミスさん。ティラミスさん、落ち着いて!」

店主が声をかけてくる。涙目になりながら、ティラミスは店主にすがりついた。

「どど、どうしよう、どうしよう紅さん~!」
「慌てないで。深呼吸して下さい。はい、吸って。吐いて。ゆっくり」

言われてティラミスは、思わず言われた通りに深呼吸をした。吸って。吐いて。す。は。

「吸って!。吐いて!。はい。落ち着きました?」
「えっ。な、なんとか」

がつくりと肩を落としながら、ティラミスは言った。

「なんであたし、こんなのんびり……出勤途中だったのに。全然。全く。まるつきり。思い出しもしないで、ごはん食べて、おしゃべりしていたなんて……」

頭を抱える。店主はちらり、とおばばと視線を交わしたが、すぐにティラミスに目を戻した。

「大丈夫ですよ。そんなに時間はたっていないから。」

それに、あなたは怪我をしていたでしょう。転んで。その話を話せば、大目に見てもらえますよ」

「そ、そうかなあ……」

「そうですよ。大丈夫」

力づけるように言われ、ティラミスは何となく、強張っていた体から力を抜いた。

「そう、ですよ。うん。不可抗力もあったもの。ちょっとは叱られるかも、だけど。転んだって言うてみます」

そう言って微笑むと、うん、とうなずかれた。

「それで、道ですけれどね。迷われたんでしょう?」

「あ、はい。ここからだ、薄荷山通り三丁目ってどっちの方向になります?」

「ここを出て、真っ直ぐ進んで下さい。明るい方へ。そうしたら、その通りが見える道に出ますよ。迷うことはありませんから」

「そうなんですか? 良かった」

ぱつ、と笑ったティラミスは、ごちゃごちゃになった鞆の中身に目を落とすと、「あゝ」と言いつつ、適当に整えた。

店主から渡された紙袋も、そっと中に入れる。

「朝ごはん、本当に美味しかった。手当てもしてくれて、愚痴も聞いてくれて、ありがとうございました」

ぺこり、と店主に頭を下げる。

「もう行くか?」

おばばが言うのに、そちらにも笑顔を向けた。

「はい。おばば……さんも。えーと、ありがとうございました」
「わしゃ、なんもとらんがのう。おお、そうじゃ」

おばばはそこで、いそいそと懐を探った。そうして何かを取り出した。

「これをやろう」

「え」

ティラミスはまばたいた。おごそかに差し出されたおばばの手のひらの上に乗っている物。

赤い装飾の入った、セロファンの袋。

小さく、ヒーローらしきイラストが描かれている。

袋には大きく、こう書いてあった。

『元祖するめジャーキー 安心カムカムパワー』

「……」

中に入っているのは、明らかに『するめ』だった。

「おばばさまは、駄菓子スキーなので……」

何かを取りなすように、店主が言った。ティラミスは何か言うべきかと思ったが、何を言えば良いのかわからず、おそろおそろ、そ

の袋を受け取った。

「美味じゃぞ」

「あ、ありがとうございます?」

するめだから、カムカムなのか。にしても、カムカムパワーって何だ。それよりも、このヒーローは何を意味しているのだ。

疑問の尽きない一品だった。

とりあえず、それも鞆にしまうと、ティラミスは改めて、二人に頭を下げた。

「あの、本当にありがとうございました」

「気にするな。まあ、良い商いができたわな」

手当てをしたわけでも、商売をしたわけでもないのに、なぜかおばが胸を張って言う。

「気をつけて。まっすぐ歩くんですよ」

店主が苦笑してから、そう言う。

「ああ、そうだ。逆むけですけどね。」

水仕事をする時に、ハンドクリームやオリーブオイルをすりこん

でおいで、薄いゴム手袋をはめた上から熱めのお湯を使つてすると、手のケアになるそうですよ」

「そうなんですか？」

「ええ。熱でオイルが皮膚に浸透しやすくなります。あと、冬場には。寝る前にオイルを塗つて、指先を軽く揉んでから、薄い木綿の手袋をはめておくと良いです……それでなくとも、時々は、指先をいたわつてあげて下さい」

「はい。ありがとうございました」

ティラミスは笑顔でもう一度、ぺこりと頭を下げた。

「それじゃ、失礼します！」

そう言つと、扉を開けて外へ出てゆく。

そして、当たり前の日々。 1

扉を開けて外へ出たティラミスは、ステップを降りると、周囲を見回した。

「明るい方……」

通りは、もやがかかったように薄暗い。何もかも、輪郭がぼんやりとして見える。そのことにティラミスは、初めて気づいた。

明るい方はどちらだろうかと見回すと、一つの方が、うつすらと明るく見えた。たぶんそっちだろうと思い、店主に言われた通り、まっすぐ歩き出す。

しばらくしてから、店の方を振り返る。

「あれ？」

そこには、見慣れた建物の並ぶ通り。いつもの通勤路にティラミスは立っていた。

ぶろろろ、と音を立て、車が横を通り過ぎてゆく。

「あたし……ここを曲がった、よね？」

確か、この角を間違えて……、と思つてきよろきよろと周囲を見回す。けれど、そこには角などなく。真っ直ぐな道がただ、続いているだけだった。

「あ……あれ？ あれ？ あれえええ？」

なんで？ と思つて混乱していると、ケータイが軽やかなメロディを奏でた。慌てて鞆を探る。今度は難なく、見つけることができた。

「はい？」

『あ、つながった！ さっきから何度もかけてたのに、返事がないから、どうしたのかと思つたわよー！』

ケータイからは、同僚の声がした。

「え、あ、みゆたん？ 何度もかけてくれてたの？」

『うん、話したいことがあつて……今、どこにいるの？』

「え、会社に行く途中の道……ああ、心配かけちゃったのね。すっごく遅刻したものね？ ごめんね。」

そう言つと、怪訝そうな声がした。

『あら？ 遅刻？ 何言ってるの。まだ余裕あるわよ？』
「えっ？」

何を言っているのだ。と、ティラミスは思った。自分があの店で店主とおしゃべりをしていたのは、どう考えても三十分以上だった。下手をするとい時間はかかっている。

「あの、いま、……何時？」

おそるおそる尋ねると、『八時半ちょっと過ぎ』という返事があった。

業務は九時からだ。確かに、まだ余裕がある。と言うか。

（あたし、……道に迷ったの、それぐらいの時刻じゃなかった？）

いつも通りに電車を降りて、いつも通りに歩いていた。その途中で迷った。

それから転んで、手当てをしてもらって、朝食を食べて……、

（どういつこと？）

なのに、その間。時間が全く流れていなかった……？
混乱するティラミスだったが、同僚はまだ話を続けていた。

『今朝は、ティラミスが掃除当番だったでしょ？ いつもならもう来てるのに、いないから。何かあったのかなあって、電話してもつながらないし』

ティラミスの会社では、経費削減やら社員の向上心を育てる何とかやらで、毎朝、部屋の掃除を社員が交代で行っている。お茶汲みも同様だ。

ティラミスのいる部署をまとめる室長が率先してやっているので、男性社員もさばれない。

男社会で育ってきた人物でもあるので、たまに会話が通じなくて頭に来る事もあるが。

「あ、あ……、そ、そうだった。あの、ごめんね。転んじやったの、途中で」

呆然としながらそう言つと、『え？』と心配そうな声がした。

『転んだって、大丈夫？ どこか打った？』

「あ、あの、大丈夫……親切な人がいて。手当てしてくれたの。だから」

店主のことを思い出して言う。そこで、妙な事に気がついた。

（あれ？ 紅さんって……どんな顔してたっけ）

思い出せない。どうして？

『あらあらまあ。そうなの？ 良かったねえ……ああ、でもそれなら、ゆつくり歩いた方が良いわよ。わかった。掃除は、あたしがしておくねえ』

同僚の声がする。

「あ、ありがと、みゆたん」

『あたしの当番の時には、代わってよ』

「うん、もちろん」

受け答えをしながら、ティラミスは狐につままれたような気分だった。いったい、これはどういう事なのだろう。

それからもう少し話をして、通話を終えた。ケータイを鞆に入れる。その時、紙袋に手が触れた。かさり、という小さな音。

そこにはショートブレッドとジンジャークッキーの袋……と、カムパワーの駄菓子。

「現実よね」

じっと見つめてつぶやく。

あの人たちは、ちゃんと存在していた。それだけは、確かだ。だ
つて。

「あたし、カムカムパワーなんて買わないし……」

あの朝ごはんも、本当に美味しかったのだ。

しばらく考えていたが、やがてティラミスはため息をつき、考
えるのをやめた。一日が始まるのだ。仕事に向かわねばならない。

「行こう」

今日も、仕事をして。きっと、落ち込んだり、泣きそうになっ
たりするだろう。

でも、そんな時にはこのクッキーを食べよう。カムカムパワーも
食べさせてもらおう。

そうして、乗り切ろう。それから。

「また絶対、あのお店に行かなくちゃ!」

うん、とうなずくと、ティラミスは歩き出した。

そして、当たり前の日々。 2

「無事に行ったようじゃのう」

おばばが言った。

「もう、迷わないでしょう」

店主は後片付けをしながら、そう言った。

「元の世界に戻ったら、驚くぞ。時間が過ぎておらんのじゃからな
あ」

「そうでしょうね」

店主は手を止めると、微笑んだ。

『迷い人』の上には、時が流れない。それはこの小路の、暗黙の了解のようなものだった。

訪れた客は、その客の住む世界から、一時的に切り離されたよう

な状態になる。そうして、この小路に迷い込むのだ。

小路を無事に出る条件は、ここで誰かの客になり、何かを売り買いする契約を結ぶこと。

一度契約を結べば、それを完遂^{かんすい}するまでは、その人物は契約主の預かりになる。そうなれば、小路に住む他の住民、他の勢力からはいかなる力も及ばせない。善意のものであれ、悪意のものであれ。迷い込んだ客がどの店に入るかで、その人物のその後が決定されると言っても過言ではなかった。

ティラミスは、運が良かった。

この通りには、呪詛を扱う者もいれば、訪れた客自身を呪いの素材にしてしまう悪辣^{あくらう}な者もいる。それらを避けて、ティラミスが入ったのは、この通りで唯一、魔法を扱わない茶屋だった。

そうして『朝食を取る』という『契約を結び』、『商品を受け取り』、『対価を支払った』のだ。

契約が成れば、小路は速やかに、客をもといた世界に戻る。世界に切り離されていた存在が、元の世界に戻るのだ。

それらの関係から、客にとってその間、時間は流れなかった事になる。

また、世界から世界へと移動する反動で、記憶に混乱が生じる事もあるらしい。

ティラミスがこの茶屋で、通勤途中だったにも関わらず、のんびりと過ごしていたのは、その辺りにも原因があった。契約を結ぶ途中であったのと、世界を移動した影響から、日常生活への感覚が鈍くなり、時間を気にする事すら忘れてしまったのだ。

契約が成った瞬間に、その辺りが戻ったので、あの騒ぎになったのであるが。

「もともと、生きる力のある人です。ここに迷い込んだのは、何かの間違いだったのでしょうか」

店主はそう言うと、テーブルを拭いた。

「また会えると良いがのう」

「どうでしょうか。すぐに忘れるのでは？」

「いやあ……、わしの駄菓子結構お茶目じゃろ？ あれで、ここでのことを忘れてしまっても、思い出してくれるのではと思ってるんじゃない」

「だから渡したのですか？」

呆れたような眼差しを注ぐと、おばばは肩をすくめた。

「絶対に忘れない、と言った者でも、界を移動すれば、忘れ果てるのが常じゃからな。まあ、ここでの出来事など、覚えておらぬ方が幸せな場合も多いが。」

とは言え、長くここで暮らしておると、たまには運命とやりに抗いたくもなる」

その言葉はさらりと言われているようでいて、どこかに苦く、痛みのようなものを秘めていた。ごくごくわずかで、注意しなければ気づかないような小さなものではあったが。

おばばが自分よりも長くこの小路にいる事を、店主は知っていた。

彼女が出会った客たちと、どのような会話をしたのか、店主は知らない。彼らとどのような関わり方をしてきたのかも。

小路の住人同士でも、相手の過去は詮索しないのが、ここの礼儀だからだ。

それでも、こんな風にぽつりと漏らされる一言から、何かあったのだろうと推測する事はできた。きつとおばばは、いつか、誰かと何かの約束をしたのだろう。また訪れるとその誰かは約束をして、その約束が、果たされる事はなかったのだ。

ここでは、良くある事だった。

店主は軽く目を伏せた。そうして詮索することはせず、ただこう言うに留めた。

「だからと言って、カムカムパワーはないでしょう」
「何ぞ、わけのわからん力がある気がするじやろう」

にやりとしてから、おばばは店主の方を向いた。真剣な顔になる。

「それで、紅どの。ものは相談じゃが」
「はい」

おばばの真剣な様子に、店主も真面目な顔になり、姿勢を正した。おばばは言った。

「お肌の手入れ法とやらを、詳しく話してくれんかの？」

ぐわけけけ。

どこかで、怪しげな鳥の聲がした。

その日、ティラミスは一日忙しかった。それでも何とか仕事をこなし、昼には同僚とランチに出かけた。店主にもらったクッキーやジャークーの事は、すっかりと忘れ果てていた。

夜。家に帰ってからようやく、それらを食べていない事に気づいた。

「あー。食べてなかった……悪くなってないかな？　大丈夫かな？」

するめジャークーは大丈夫そうだった。店主のくれたクッキーの方は、手作りっぽかったし、保存料なんて入っていないだろう。置いておくと悪くなる。

ごそごそと袋を取り出し、中身を見る。ショートブレッドとジンジャークッキーは、扱いが悪くなかった為か、割れて砕けてしまっていた。

「やだ、粉々……あれ？」

クッキー以外にも、何か入っている。取り出してみるとそれは、ティーバッグだった。空気が入らないようぴっちりとしまる小袋に、一つ入っている。

「紅さんのサービスかな」

ティーバッグを自分のマグカップに入れて、電気ポットから湯を注いだ。ちゃぶちゃぶ、と揺らしてから、色がついた辺りで引き上げる。

「美味しくない……」

あの店で飲んだ紅茶とは、まるで違う味がした。たぶん、この紅茶は、良い葉っぱを使っている。だって、紅さんが選んだのだもの。でも、美味しくない。どうしてこんなに違うのだろう。

「お茶の淹れ方も、教えてもらえば良かった……」

何となくがつくりきて、ティラミスは紅茶をすすった。それから、自分の手を見る。

「指先をマッサージ、だっけ？」

ハンドクリームあったかな。とつぶやいて、ティラミスは自分の指をそつと撫でた。

「絶対、また、あのお店に行こう……」

見つかるかな。会えるかな。
そんなわくわくするような、不思議な気分を味わいながら。

『ただの茶屋』では、やって来る客の波が一段落し、店内が静かになった。

もう、夜は遅い。

店主は閉店の札を店の前に出すと、店内の掃除を始めた。今日は

なぜか客の入りが良く、その分、対応に気を使った。

掃除を終えると店主は、明日の準備をした。それが終わってから、ミルクを入れた小さなカップを裏口に置いた。

「約束通り、ミルクです。みなさんも、お疲れさま」

そう暗がりには声をかけると、ぱたり、と扉を閉める。やがて、店の灯が消えた。

『ミルク』

『ミルクだ』

『約束、守った』

ささやく声がした。

『うれしい』

『うれしいな』

『ミルク』

『美味しいミルク』

『わしら、守る』

『ちゃんと守る』

『約束、守ったから』

『わしらも、約束、守る』

『ここに来る客は』

『みんな、わしが、守るよ』

歌うようなささやきは、静かに広がり、消えた。カップの中のミルクもまた。

小路は、静寂に包まれた。

閉じられた裏口の扉の前には、空っぽになったカップが一つ。店は静まり返り、小路もまた静かだ。

そうして、『ただの茶屋』の一日も終わる。

第一話 あとがき。(前書き)

エプリスタで書いたままのあとがきです。

第一話 あとがき。

あとがき。

第一話が終わりました。

出演してくれたスイコレ友達のティラミスさん、みゆたんママさん、謎のオババさま、快く名前を貸してくださって、ありがとうございました> (――) <

番外編ではじんさんも、ありがとう(^ - ^)

この話は、スイーツコレクション2で遊んでいた時に知り合ったティラミスさんが、『お店の名前が素敵』、なんだか、いろいろお話を考えちゃいそう』と言ったのがきっかけで、出来ました。

店の名前は、GREE版スイコレが『茶に恋 屋』、モバゲー版スイコレが『魔法小路のただの茶屋』。

そう、ゲームで何気なく作った店の名前が実は、由来だったんですね。

それで、「だったら、小説書いてみるか」となりまして。どうして店の名前が「ただの茶屋」なのか、その辺の設定を、それから考え始めました。わりと適当です。

ただし、二次創作というわけではありませんので、登場する人たちその他は、ゲームの内容や、登場人物とは違います。私のオリジナル。

名前を貸してくれた人たちについては、なるべく本人のイメージから離れないように書いてはいますが（おばさまの。駄菓子スキーはそのまんま）、ちょっとこれは……というところかもしれない、それは私の書き方がまずかったから。ご本人とは関係がありませんので、その辺り、ご了承のほどを。

この話はまだ続きます。第二話以降は、登場人物が徐々に増えてゆきます。お楽しみに。

最後に、「続き書いて〜」と楽しみにしてくれていた福寿草さん、「なんか好き」と言ってスターを投げてくれた玄河一鶴さん、

読んでくれたあなた。

ありがとうございます（＾Ｏ＾）／

● 番外編 名間四季春 早春茶（前書き）

アトリエベにべにの拍手お礼文として、上げていたものです。

●番外編 名間四季春 早春茶

台湾の早春茶をどうぞ。花のような香りがします。

本日は、名間四季春（ミンジェンスージーチュン）早春茶。
すつきりとした味わいです。

* * *

「紅^{べに}さーん、このお茶なに？ すごくサワヤカ」

「来てたんですか、ティラミスさん。台湾のお茶です。早春に摘まれたお茶ですよ」

「はー、……春〜！ な味がするっ」

「このお茶は、味と香りのバランスが良いので、初心者にも喜ばれます。発酵が軽めなので、緑茶にも似ているでしょう？」

「花みたいな香りっ」

*
*
*

初心者向けで、値段もそれほど高くはありません。一度お試しを。

●番外編 レモンバームのレモネード

「紅さん、これは……すっぱー!!!!」

「あ、ティラミスさん。レモンバームで作ったレモネードです」

「うっ……すっぱ……でもサワヤカ」

「レモンバームのフレッシュで作りました。このハーブは、生のほうが良い香りがするので」

「どうやって作るの?」

「ホットは簡単です。急須の三分の一ぐらい、レモンバームの葉を入れて。湯を注いで三分」

「ふむふむ」

「その間にレモンを絞って、砂糖とハチミツ」

「をを」

「今日は二人分です。レモン一個分使いますね」

「はい」

「砂時計の砂が落ちました……か?」

「三分たちましたようっ」

「では、このティザンを注いで……ミントの葉を飾りましょう」

「きゃー♪ ちょっとカワイイ」

「はい、できあがり。疲れが取れますよ」

* * *

レモンバームのレモネード。すっぱいけど、疲労回復には効果アリです。

冷たいのを飲みたい場合は、しぼったレモンと輪切りにしたレモン、砂糖、ハチミツ、レモンバームの葉を鍋で煮詰めて、

作った原液をびんに保存。飲む時は五倍に薄めます。

参考『猫のしつぽ カエルの手 秋冬編』ベニシア・スタンリー・スミス

薄めて飲む方の、原液の作り方がDVDブックにあります。

●番外編 ほっじ茶カモマイル

「ひっひっひ！ 今日のお茶は何かのう」

「おばさま。今日は、ほっじ茶にカモマイルの花を混ぜてみました」

「カモマイルと言えば、かみつれの花のことじゃな。ほっ。ほんのり甘くて、りんごのような香りじゃ」

「ちょっと、体が冷えたかな、という時に良いですよ」

「ほっほ。では、ミルクティーにしてみらおうかのう」

「ちょっとお待ちくださいね。……はい、どうぞ」

「うむ。まろやかなミルクで、香ばしいほっじ茶と、ほんのり甘い花の香りが調和しておるわい。

見事、見事！

よし！ では、これをやろう！」

「……」

「遠慮はいらんぞ」

「しておりませんが……、」

「勇気りんりん、れつつカムカムパワーじゃ！」

「……するめジャーキー……」

おばさまは、駄菓子スキー。

参考（と言って良いのかこれは）『元祖するめジャーキー』タクマ
食品

安心カムカムパワー、スルメンジャーの表示が謎を深める。

ウィルフレッドという男。 1

フォレシアの国ミストレイクの騎士、ウィルフレッド・ホークは、
生真面目、石頭、朴念仁と、三拍子そろった男だった。

剣の腕は領内でも一、二を争う。風采も良く、家柄はさほど高いわけではないが、低いというわけでもない。

あまりにも高過ぎる身分の者だと、婚約者などが子どものころから決まっている。身分の低い娘は最初から相手にしてもらえないだろうが、ほどほどの身分の者なら、平民でもどうかすれば、結婚相手に持ち込める。

ミストレイク侯の覚えもめでたく、今後の出世も見込まれる。そういうわけで、この若き騎士は、領内の娘たちの『恋人になりたい相手』、『結婚したい相手』第一位に輝いていた……叙勲されたばかりの、最初のころは。

しかし。

「サー・ウィル、エリーが。うちの妹がこれを団長にと……」

「そうか。何をしている、マーク。素振り百本がまだだぞ」

「あの、団長。厨房で働いているエイミって女の子が、そこで手を振……」

「厨房か。食事はまだだぞ、グイード。馬の様子は見たのか。騎士たるもの、馬は相棒にも等しい存在。健康管理に気を配れ」

「サー・ウィル、アイリスが団長に、その、汗をかいた時に手拭い

をと言っ……」

「アイリス？ ああ。良く差し入れをしてくれる女性だな。仲が良
いな、エーリック。だが、任務に支障のないようにしておけよ」

騎士団長にまでなったウィルフレッド・ホークは、朴念仁に磨き
をかけ、訓練、訓練、ただ訓練。部下をしごき、自分自身を鍛え、
彼に思いを寄せる娘たちの突撃を、ことごとくかわし続けた。本
人にそれと自覚のないままに。

娘たちは語る。

「かなう限りまばたきをしたり、体をくねらせたりしてみたけれど、
『どうした、腹でも痛いのか』って……あたしの魅力は腹痛と同じ
なの？」

「何度も、何度も、差し入れをして印象づけようとしてきたんだけ
ど、『ああ、ありがとう』の一言で終わり。どうして女が差し入れ
をしに来るかって、考えた事もないのよ、あの人は……」

「あたし、あたし、魅力ない？ そんなに女として終わってる？」

部下や同僚は語る。

「あの人の背後さあ。憧れてるのに声がかけれなくて、涙振り絞
ってる娘さんが、そろそろいるんだよね。

でもぜんぜん気がつかないんだよ。殺気とかなら、すぐ気がつ
くの」

「エリーにサー・ウィルに渡してって頼まれて、橋渡ししようとし

ただんだけど。お礼は言うけど、それだけなんだよ。はいどうぞ、ありがとう、で終わっちゃうんだ。

なんで自分に渡されてるのか、わかってないんだよ！

俺、最近じゃ、怨みのこもった目で見られるんだよ、妹に。何か邪魔してるんじゃないの、お兄ちゃんって！」

「気の毒に、アイリス……あれだけ熱視線送り続けているのに、騎士団の別の誰かが相手だと思われてるよ……」

あまりの鈍さに、自分では相手にされないとあきらめて、『サー・ウィルの心をつかめ』レースから脱落、別の誰かと結婚してゆく娘たちが続出。

本人に言わせれば、

「俺は、女性にょしゅうに好意を持ってもらった事などないぞ？

エイミは、騎士団の皆を気づかせてくれ、ついでに俺に声をかけていただけだ。アイリスも同様だな。

騎士は皆を守る者。だからだろう。二人とも、気遣いの良く出来る女性だ。俺の同僚と結婚したが、あれだけの女性たちだ。きっと良い家庭を築くだろう。

マークの妹か？

エリーとか言ったか。騎士団の若手とこの間婚約したな。なんでも、悩み事を相談している内に親しくなったらしい。めでたい事だ」

との事であった。

秋波を送り続けた娘たちの好意を見当違いの方向に解釈し、見か

ねた彼の部下や同僚が取り持とうとすれば、そちらが網に引っかかる。

あまりにも手応えがないので『わたしには魅力がないの？』と悩んでいた娘は、なぐさめてくれた若手騎士に次々と心変わり。

その全てが、彼を中心に起きていると言っのに、本人のみが無風状態。

何が起きていたのか彼自身は全く気づくことのないまま、彼女たちの結婚を祝福するという、悲喜劇が繰り返されていた。

朴念仁も、ここに極まれりである。

ウィルフレッドという男。 2

そんなウィルフレッドは、良く間違えられるのだが、貴族出身というわけではない。

長ったらしい名前に、ホークという名が後に続くので、それなり
の家系の者なのかと思われる事がたまにあるが、

彼の名前は実は、祖父と曾祖父が面倒くさがって、生まれてきた
子供（彼の父親）に自分たちの名前、ウィルフレッドを、そのま
まくっつけて名付けたものだ。

その父親も、息子が生まれた時、名前を考えるのが面倒だったら
しく、自分の名前をそのまま息子につけた。

そうして、ホークという名は、実は彼の本名ではない。

フォレシアの国では、貴族以外の庶民や下級騎士などには、家系
はないに等しい。姓を持たぬ方が当り前である。

しかしそれでは、同じ名前の者が大勢になって混乱する。

だから庶民は、職業や、父親の息子、母親の娘、出身地などを、
名前の後ろにつけて名乗る。

鍛冶屋のディック、薬草師のマリー、ジャックの息子のサム、ア
ンナの娘のローズ、

窪地の村のロン、魚の村のミナ、という具合に。

男性は父親の名を、女性は母親の名を、自分の系統として名乗る
事が多かった。ことに、ミストレイクの庶民は女系の一族が多く、
女性が一家の主として、法的に認められる場合も多かった。婿養子
も珍しくはない。

貴族はそうではない。家系を継いでゆくのは、男性に限られている。

男性は父親の家系の名を名乗る。女性は男性の家に嫁ぐと、父親の家系の名のあとに、男性の家系の名を付け加える。息子や娘が生まれた場合は、どちらも父親の姓を名乗る。

ミストレイク侯と奥方のアリシアの場合、二人の正式な名前は、

ロード・アラン・ウィリアムソン・ミストレイク（ウィリアムの息子、ミストレイク侯アラン）と、

レディ・アリシア・ロンヘイル・ミストレイク（ロンヘイル家より嫁いだミストレイク侯夫人アリシア）となる。

それが貴族の、決まりのようなものだった。

だが、ウィルフレッドの名、ホークは、家系を現すものではない。単に、彼の名が父親の名と同じであったため、区別をつけるために、つけられたあだ名である。

少年時代のウィルフレッドは、母親似のやさしい顔だちをした、物静かで感受性の強い少年だった。

父であるウィルフレッドは、彼が物心つくころには既に故人。しかし彼は、ミストレイクでは良く知られた剣士だったらしく、ウィルフレッドは、『あの』ウィルフレッドの息子、と言われて育った。

母、アンナは先代のレディ・ミストレイクの側仕えをしていた侍

女であつたが、夫が亡くなつた時に職を辞し、城の近くにこじんまりとした家をいただくと、そこでウィルフレッドと暮らした。

裁縫の腕があつたので、時に城の貴婦人たちから、仕立ての仕事が入る。二人はそれらの収入から、つましく暮らした。

やわらかな金の髪に灰色の目の少年は、母を助けて良く働いた。

父の友人であつたサー・ジョージが親子の様子を気にして、時に訪問してくれ、そんな時にはウィルフレッドは、父親とは、このような人だろうかと思つたものだつた。

筋骨たくましく、豪放磊落ほうほうらいらくな男だつた父は、様々な逸話にことかかず、亡くなつてからもあちこちで、『ミストレイクのウィルフレッド』の話が語られていた。

そんな彼らが『ウィルフレッドの息子』に期待するものは、やはり、父親と同じような豪快な男。

小さい内は良かったが、成長するにつれ、『ウィルフレッドの息子』には期待が寄せられるようになる。

噂を聞いた物見高い人間が、わざわざのぞきに來る事すらもあつた。

そつした人は、母親似のウィルフレッドを見てがっかりし、仕立ての仕事をする母を助ける少年を見ると、侮蔑の表情を浮かべた。

武器を持たぬ者は、男ではないという、勝手な持論を振りかざし、『あのウィルフレッドの息子がこんなものか』と吐き捨てたのである。

ひどい者は、『父親と全く似ていない、なよなよした奴だ。母親が浮気をしたのではないか』とまで言つた。

母、アンナは何を言われても、気にした様子は見せなかった。しかし息子の方は、そうはいかなかった。何年も、何年も、そのような言葉を投げつけられ、彼はほとんど鬱屈した。

訪れるサー・ジョージが心配するほどに。

そうしてある日。彼はふい、と家を出た。それから三年ほど、戻らなかったのである。

その三年の間、彼がどこでどうしていたのか、今も知る者はいない。

ただ、三年が過ぎて戻ってきたウィルフレッドは、かつてとはまるで違う青年になっていた。

伸びた背に、鍛えられた体。隙のない動きに、鋭い目つき。

どこで身につけたのか、冴えた剣技をふるう男になっていた。

そうして彼はミストレイクの、領主主催の武術大会に出て、あっさり優勝してしまったのである。

そんな彼が、領主の目に止まらぬはずがない。

先代ミストレイク侯ウィリアムは、彼の父であるウィルフレッドの事を良く知っていた。その息子という事で、彼は大会の最初からウィルフレッドに注目していた。

大会で優勝した彼を見て、報奨を渡す場面で、即座に城へと誘致。彼はその場で城に召し抱えられる事になった。そうしてサー・ジョージの元で騎士としてのふるまいを学んだ後、叙勲され、騎士になった。

新しい英雄の誕生だと、人々は、大いに彼を祝福した。

ウィルフレッドという男。 3

最も、領内の者が最初から、彼の成功を喜んだわけではない。

彼の身近にいた人々、特に子どもたちから彼を見てきた人々は、驚き怪しんだ。ウィルフレッドの変わりようを、受け入れる事ができなかつたのである。

また、ウィルフレッドを見にきて落胆した人々のうち、『なよなよとして』と馬鹿にしていた者たちは、なかなか彼を認めようとはしなかつた。まじないを使ったのだとか、卑怯な手段を使ったのだとかいいうわさを、彼らはあちこちで吹聴した。

しかし、ミストレイク侯のお声がかかり、叙勲され、騎士になつたという話が伝わり、

一転して領地の人々は歓迎する空気となり。悪口を続ける人々は、立場が悪くなつてゆき、沈黙するようになっていった。

そのころの彼の呼び名は、『ウィルフレッドの小さい方』とか、『息子の方のウィルフレッド』。

あの父親の息子なら、強くもなるだろうという雰囲気、人々は噂した。

そんな彼が、一気にもてはやされるようになったのは、ロニ村を襲つた盗賊を撃退してからである。

たまたま休暇中だつたウィルフレッドが、同僚の騎士と共に訪れたロニ村を、盗賊が襲つた。盗賊は三人、手練というわけでもなかつたので、二人で撃退してしまつたのであるが、

その話が大いに歓迎され、あちこちで語られたのである。

尾ひれを盛大に付け加えて。

ウィルフレッドは元来、寡黙^{かもく}だったため、さして自分の行為を吹聴したりはしなかったが、共に闘った同僚の騎士は、そうではなかった。何があつたか尋ねられると、彼は嬉々として、自分たちの活躍を語った。

話を聞きたがる者は多く、そうした者は酒場で酒を奢つては、彼に話をしてくれと言った。そこで彼は張り切つて、彼らが喜ぶような、やや（と言つかかなり）誇張した冒険譚を語った。

そうして、最後にこう言った。

「それにしても、闘つてゐる最中のあいつ、おっそろしく目つきが悪い。獲物を狙う鷹^やみたいな目つきだぜ。

あれで剣を構えて、雄叫びを上げて突進するんだ。怖いなんてもんじゃないよ。悪人も泣いて逃げ出すしかないさ」

彼としては何を意図する事もなく、自分を持ち上げるため、ウィルフレッドを揶揄^やしてみただけであつた。

しかし、聴衆は、そうは思わなかった。

「鷹のような目の騎士……」

この言葉は、瞬く間に広まった。

そうして彼らの活躍（と言つか、大半がその同僚騎士の創作物語）が、あちこちで語られ、繰り返されているうちに、

「サー・ウィルフレッドは鷹の目を持っている。尊い隠者から、特別な力を授かり、それで雄々しく闘えるようになったのだ」

「あまりに素早く走るので、宙を舞っているかのようにだった。彼のひとにらみで、盗賊たちは倒れ伏した」

「サー・ウィルフレッドは悪人の嘘や偽りを、その目であばき、鷹の声でもって相手を倒す」

などと言う、なんだそれは。という話に変化。

娯楽を求める人々によってさらに、やってもいない盗賊退治や、森の獣との戦闘の話が付け加えられて、あちこちに流出。

気づいた時には、『鷹のウィルフレッド（ウィルフレッド・ホーク）』という名前が定着してしまっていたのである。

ちなみに本人の感想は、

「飛んだりはねたりした挙げ句、奇声を上げて相手を睨みつけた、だと……？ 俺は、気の触れた道化か」

今でも不本意らしい。

* * *

正式な騎士になった後、ウィルフレッドは城住みとなり、母の暮らす家に戻ることは、少なくなった。

しかし、ウィルフレッドがいなかった三年の間、母であるアンナにも変化は起きていた。

亡き夫の親友であり、今ではウィルフレッドの後見人のような立場となったサー・ジョージから、求婚されていたのである。

息子の消息が知れるまでは、と断り続けていたのだが、ウィルフレッドが叙勲され、騎士となったのを見届けると、安心したのだろう。

サー・ジョージの申し出を受け、ひっそりと小さな式を挙げた。

やがて、娘が産まれる。

ウィルフレッドには妹となる、ローズ。

この頃には、ウィルフレッドは遠慮のようなものを感じたのか、母の元に行くことは、めったになくなっていった。

そうして、城での勤めをひたすら真面目に実直にこなし、

訓練、訓練、また訓練。

ただでさえ、女性の心理にうとかった男は、

朴念仁への道を突き進み続け、今に至る。

ちなみに母も、今では十二歳になったローズも、それらしい女性のうわさはおるか、影すら見えないという状態が、

あまりにも何年も続くので、

身分はもうどうでもよいから、幸せな結婚を！と日々願っているのだが……、

鈍すぎて全く気付いていない。

ミストレイク城の午後。 1（前書き）

服装で悩みました。

十二〜十四世紀ぐらいのイングランド辺りを念頭に置いています。が……こうした方がというご意見おありの方、コメントいただければありがたいです。

ミストレイク城の午後。 1

「あらまあ、縁結びの天使さん。眉間にしわを寄せて、どうしたの？」

その日、泥と汗にまみれ、仏頂面をしながら午後の陽ざしの中、ミストレイク城の裏庭を歩いていたウィルフレッドは、にこやかに微笑むミストレイク侯の奥方、レディ・アリシアに呼び止められた。裏庭は、兵士の訓練場として使われる。彼は兵士として新しく入った若者たちの、訓練を終えた所だった。

その内の一人には、やたらまとわりつかれた。英雄視されたあげく、聞きたくもない吟遊詩人の歌まで披露された。

その歌には、『ミストレイクのウィルフレッド』が、

鷹のごとく悪人を見据えるとか、

雄叫びを上げて悪に立ち向かうとか、

そういう類の言葉が散りばめられていた。気分を高揚させるような旋律で。

その場にいた部下や同僚は、一斉に青ざめた。彼がそのたぐいの歌についてどれだけ嫌がっているか、知っていたからである。

案の定、そんなものが世間に出回っているのかと、ウィルフレッドの機嫌は急降下した。それからの訓練は、訓練は過酷なものになった。その若者を止めようとした部下はもちろん、たまたまその場にいただけの同僚たちまで巻き込んで。

今、裏庭には、力尽きた男たちが、累々と横たわっている。

そんな中、一人元気なウィルフレッドは、泥だらけになった服を

脱いだ。上半身裸になって歩き出す。井戸水で汗を流し、頭から水をかぶれば、すっきりするだろうと思つての事だ。

そうして歩いていたのだが、ふと、若者の披露した、奇天烈な歌を思い出してしまふ。つい、眉間にしわが寄つた。

そこへ、この呼びかけである。ウィルフレッドの眉間のしわは、さらに深くなつた。

「レディ・アリシア。なんですか、その妙な呼び名は」

「あなたの事に決まつているじゃないの、サー・ウィル。周囲に春を振りまく男と評判よ」

「いつ、俺……いや、わたしが春を振りまいたんですか」

既婚の貴婦人のたしなみとしてブルネットの髪を結い上げ、金のネットでまとめたレディ・アリシアは、空を思わせる青い目に愉快そうな色を浮かべ、ウィルフレッドを見上げた。

青く染められたローブは、上質のブロード。薄い毛織物は、彼女の瞳と同じ色に染められている。

そこに緑のサーコートを重ね、飾り帯を腰にしめていた。遠目にはわかりづらいが、近づくと、ローブの襟ぐりや袖口、裾に、細かな縫い取りがされていることがわかる。

一見簡素に見える装いの中に、手の込んだ品の良さをかいま見せる出で立ちは、ミストレイク候の奥方として、相応しいものだつた。

元は隣の領、ロンヘイルの第一侯女。良く人を見、氣遣いを示す、それでいて気さくな人柄の貴婦人は、城内はもとより、領民からも人気が高い。

「無自覚つて罪ね。そのたくましい筋肉。禁欲的な面差し。今も、半裸のあなたを物陰からのぞいている娘さんたちがいるのよ。

ほら、あそことか。あの辺りとかね？」

くすくす笑って手で指し示す。思わずウィルフレッドは、そちらを見た。

すると、慌てたような気配や、がさがさという音、きゃーという声、奥方さま、ひどーい！　とかいう声がして、ぱたぱたと足音が遠ざかった。

一人二人ではなかった。

「何だつて、物陰からのぞいてたんだ」

「本当に、無自覚って罪ね」

奥方はため息をついた。

「道理であなたの周囲、騒がしいはずだわ」

「騒がしいですか？」

ウィルフレッドは首をひねった。

「騒がしいわよ。男女のどたばたを描いた寸劇を、延々と見せられているみたいだわ」

「寸劇？　何のことです」

奥方の言葉に眉をひそめる。そんなどたばたがあつたか？　記憶にないが。

奥方は、はあ、と息をついた。

「本当に自覚ないのね……あなたの周りつて、若い娘さんと若い騎士が、次々とおめでたい事になるじゃない。

なかなかないわよ、こんなことつて」

「そうですか？」

「ええ。娘さんたちにとっては、気の毒だったのか幸いだったのか、悩む所だけれど」

「幸せな家庭を築いているのです。幸いに決まっていますでしょう」

真面目な顔で言うと、奥方はなぜか、天を仰ぐような仕草をした。

「彼女たちも、あなたにだけは言われたくないと思うけれどねえ…

…」

万感を込めたかのような口調で言うと、レディ・アリシアは首をふり、肩をすくめた。

「まあ、良いわ。わたくしの中であなたは、春を振りまく、縁結びの天使さまみたいなものなのよ」

ウィルフレッドは、仏頂面になった。

「やめてください。自分が妙なものになった気がする。それより、何か御用ですか」

するとレディ・アリシアはあっさりと、衝撃の発言をしてくれた。

「ああ、そうそう。用事があったのよ。忘れるところだったわ。

アランがあなたを呼んでいるの。だから呼びに来たのよ」

ウィルフレッドは啞然とした。あるじである領主が自分を呼んでいるのだと？

騎士としては、最優先の用事ではないか！

「忘れないで下さい！　と言つか、それをまず、一番先に言って下

さい！ 急いでおいでですか」

「あら、そんなに慌てなくても。身なりを整える時間ぐらいはあるわよ、大丈夫。

それより、頼むから、その格好で城の中をうろつかないでちょうだい。若い娘さんたちの間でいろいろと騒ぎが起きるから」

奥方は、上半身裸のままのウィルフレッドを眺めて言った。

確かに半裸の男がうろついているのを目撃したなら、若い娘には衝撃だろうし、嫌がるだろう。

そう思ってウィルフレッドが言くと、彼女から生ぬるい眼差しを注がれた。「本当にわかってないのねえ」と言われる。何がわかっていないと言うのだ。

ミストレイク城の午後。 2

「では、少し身ぎれいにしてから伺います。城主の部屋でよろしいのでしょうか」

気を取り直してウィルフレッドが確認を取ると、奥方は「ええ」と言ってうなずいた。

「わかりました。しかし、この城の女主人であるあなたがわざわざ、一介の騎士を呼びに来るなど、あまり感心しません。次からは、侍女が小姓に申しつけて下さい」

供も連れず、裏庭にやって来たレディ・アリシア。高貴な身分の女性が一人で歩き、半裸の男に話しかけるなど、あまり褒められた行いではない。

しかも、彼女はまだ若く美しい。悪意ある目で見られたなら、どのような噂が流れるか、わかったものではないのだ。

そう思ってウィルフレッドは忠告した。しかし、レディ・アリシアは軽く眉を上げると、きっぱりとした態度で言った。

「わたくしの振る舞いは、わたくしの決めること。それこそ一介の騎士であるあなたが決めることではないわ。

わたくしは城の女主人として、またこの領の女主人として、采配を振るい、指示を出し、城に勤める女たちを率い、また村人たちの面倒を見ている。

そのわたくしが、城に仕える忠実な騎士に声をかけたからと言って、身分に相応しくないなどとは言わせない。誰にも文句は言わせません。

あなたにもです、サー・ウィルフレッド」

その態度にも、言葉にも、女主人としての誇りがにじみ出ていた。この方は、確かに、言うだけの事はしている。そうウィルフレッドは思った。

城と言うのは、ある意味、生き物だ。

何十人、時には百人近い人間が城の中で働き、城を城たらしめる。男たちをまとめ、外敵に対するのが城主の役目なら、人間が暮らしやすい場所となるよう、城の中を整え、奥を取り仕切るのが城主の妻、女主人の役目だ。

それは時に、鋼のような意志を必要とする。

城で働く女たち……多くの部下を、従わせねばならないからだ。

心の弱い女主人では、なめられる。

そうして下のものが好き勝手をし始めれば、

それは混乱となり、……領の中心である城の乱れは、やがては領すべての混乱となってゆくのだ。

レディ・アリシアは、城で働く女たちを、実に見事に取り仕切っていた。

また、彼女は、城下の村々にも良く顔を出した。貧しい者が暮らしてゆけるように気を配り、城で育てた薬草を、病や怪我に倒れた村人に渡しに行く事もしていた。

それもまた、強い意志の現れだ。なやかな貴族の姫君は、時に下々と関わることを嫌がる。

着飾った姫君が、薬草を育てるために泥だらけになっていたレディ・アリシアを見て、嘲るような笑い声を上げたのを、ウィルフレッドは見た事があった。

レディ・アリシアはしかし、頓着しなかった。はつきりとした意志を持って彼女は、『自分の』村人と関わりに行き、彼らを助け、今では、村人たちからの、絶大な信頼を勝ち得ている。

「侯が嫌がられるでしょう」

それでも、女性の立場は脆い。レディ・アリシアの評判に傷がついてはならないと、ウィルフレッドはそう言った。すると彼女は、ふんと鼻を鳴らした。

「お馬鹿さんね、ウィルフレッド。わたくしが何をしているか、どのような人間なのか、一番良くわかつているのはあの人なのよ。

あなたを呼びに行くわたくしが言ったのも、ちゃんと聞いていたわ。知らないわけじゃないでしょう？ 頼むと言ったのも、あの人よ。どうしてそれで、あの人嫌がるの」

「いえ……しかし。奥方さまは若く、……その。わたしのような男と、二人きり、では。妙な噂になったら……」

何となく気押されて、しどろもどろになりつつ反論すると、レディ・アリシアは可哀相なものを見るような目つきになった。

「わたくしと、あなたが噂になるの。あらまあ」

「そうです。そうなつてからでは遅いと……」

「あの人、面白がると思うわ」

なぜに。

「だって、あなたつてば、『あ』ウィルフレッドですもの」

『あ』とは、どの『あ』なのだ。

「飛んだり跳ねたり奇声を上げて、相手を睨む男ですか」
「それじゃないわよ。それでも良いけど」

どこが良いのだ。

「あのねえ。わたくし、アランを心から愛しているのよ。それは皆も知っているはずよ。そうでしょう？ 違う？」

腰に手を当て、呆れた顔でレディ・アリシアが言った。

「いえ……その通り、ですが」

「なのにあなたの方は、浮いた噂一つもない人間じゃないの、サー・ウィル。一度でも、恋人らしい女性ができた事があった？」

「それは……その通り、なのですが」

「だったら、噂はこうなるわ」

レディ・アリシアはふー、と息をつく、芝居の台本を読み上げるかのような口調で言った。

「今まで女に目もくれなかった、『あの』サー・ウィルフレッドが、美しく心優しいレディ・アリシアに身分違いの恋をしている。

貞節なレディ・アリシアはしかし、彼を愛する事はない。

かなわぬ恋心に身も心も焼かれ、気の毒に、サー・ウィルフレッドはやつれはててしまった」

沈黙が落ちた。

「俺があなたに恋をしている云々はともかく……、最後の身も心も焼かれとか、やつれはてたとか言うのは、何の冗談ですか、レディ・

アリシア」

「多少の脚色は、あつた方が面白いじゃない」

「脚色してどうするんです。第一、誰が本気にするんですか、そんな話」

「アランは喜んで聞くと思うし、笑い転げてあちこちに触れ回ると思っわ」

駄目だ。と、ウィルフレッドは思った。

女性に口で勝とうなどと、思つてはいけなかった。母とローズの買い物に付き合わされた時、心の底からそう思つたではないか！

「そう言っわけだから、わたくしは大丈夫よ。むしろ、女が上がるわね」

「なぜですか」

あまり聞きたくはなかったが、レディ・アリシアが満面の笑みを浮かべていたので、ウィルフレッドはつい尋ねた。

そして、脱力した。

「だって、『あの』ウィルフレッドに懸想された女ですもの。この辺り一帯で、評判になるわよ。」

美しく慈悲深く、美德にあふれたわたくし。そのわたくしに片思いをする騎士。

吟遊詩人がきつと、美しい歌にして広めてくれるわ。楽しみだ」と！

ほほほほ！ と高笑いをするレディ・アリシア。

男とは、女に決して勝てないものであるらしい。

いわく言い難い敗北感を味わいながら、ウィルフレッドはそう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2588y/>

魔法小路のただの茶屋

2011年11月26日18時58分発行